故上野直蔵同志社社葬

式辞

木枝燦

夏休みが終わり、秋の気配が濃くなろうとする去る十月二日午後六時八分、上野直蔵先生は卒然として天に召され、神のみ許に帰られました。本日ここに、広く各界の皆様方、ご家族ご親戚、ご友人ご門弟、校友同窓ならびに教職員、在学生あい集い、ありし日の先生を偲び、同志社社葬の礼をもって深く哀悼の意を捧げ、ご冥福をお祈り申し上げるとともに、上野先生を同志社に与え、大きな業をなさしめられた天父のご恩寵に感謝を捧げたいと存じます。

思い起こしますれば上野先生は、滅多に弱音を吐かれませんでした。このことは、学問研究の道においても、教育指導の面においても、学校運営の衝に当たられる場合でも、さらに日常生活の隅々まで、そうであったと思います。昨年秋、先生は期するところがあってアルコールの摂取をきっぱりとおやめになりました。年を越して二月ごろからお風邪の気味で、その後微熱が続いていたようでございます。周囲の者が心配してご静養をお願いいたしましても、総長・理事長としての重責をつねに第一にお考えの先生は休もうとはなさいませんでした。その間にわたくしも先生にご心労をおかけしたことが数多くございました。「鈍なことでございます」とお詫びいたしますと、「まあ

ぼちぼちお気張りやす」とおっしゃいましたが、そのご口調を忘れることはできません。その京都弁が先生独得の励ましのお言葉と感ぜられて嬉しゅうございました。今にして思えば、その時お体の不調を誰よりもご存知であった先生が、ご自身に向かっても言い聞かせておられたのではなかったかと存じます。

わたくしが先生と直接お話ができるようになったのは昨年の四月以降のことであり、わずかに一年半の期間にしか過ぎません。しかも日々の校務に追われており、なぜもっとご指導を乞わなかったかと悔やまれてなりません。上野先生もまた、理事会を中心とする諸会議や同志社内諸学校に関する重要事項の処理、あるいは校友会や同窓会の会合、さらに学外私学関係者からのご相談などで、入院されます前日まで寧日とてありませんでした。しかし折々の機会には、文字通り耳を傾けて話を静かに聞かれ、そのあと鋭いご質問があり、最後に豊富なご経験、深い洞察ならびに大局的な見通しに基づくはっきりしたご自身のお考えを述べられるのでありました。無駄な修飾や誇張はお好きではなく、特に表現の曖昧さや言い間違いはお嫌いで、しばしばはっとするようなお教えを受けたものでございます。先生は樹木や草花に対する愛情の深い方で、それらの名前を詳しくご存じでしたが、ある時、「新島先生の良心碑の後ろの大木は何ですか」と伺ったところただちに「樟だ」とのお答えでした。「樟もありますがそれとは違うよく似た大木があります」と申しあげたところ、しばらく考えて、「そうか」とおっしゃいました。その翌日ご連絡があり、あの木は小賀玉の木であるとお教えいただきました。先生はただちに自らその木を確かめ、名前をお調べになったのです。わたくしは小賀玉という名前を教わりながらすぐにはなかなか思い出せません。しかし先生は一度覚えたら決して忘れず、必要な時にはただちに思い出すことができる素晴らしい記憶の持ち主であられました。何か秘訣があるのか、伺おうと思いながら最早それも不可能となってしまいました。

英文学者としての先生のご業積については、わたくしは申しあげる資格はございません。しかし

チョーサーに関するご研究の成果は、今でもその道の人々の必読のものであると聞き及んでおります。また多くの人材をお育てになり優れた後継者を育成されました。これらのことは先生のお人柄から推察して当然そうであろうと存じます。苦節の末に同志社大学予科にご入学後ご昇天までの六十年間は、先生はまさに同志社とともにあられました。特に一九六〇年（昭和三十五年）大学長となられてからは、キャスパスの過密を解消し、教育と研究の基盤を打ち立てるための、校地問題の自主的解決に心を砕かれ、田辺の新校地取得という思い切った方策をおたてになりました。先生は慎重なご性格でしたが、一方ではまた大局的な立場に立って「思い切った手」を打てる方でもありました。同志社国際高等学校の誕生もその一つの現れであり、先生は同高等学校の生みの親であり育ての親であります。また同志社創立百周年を記念して各界より寄せられました浄財の一部をもって新島基金を設立され、国際交流にも力を注がれました。特に中国との学術文化交流は先生のご努力によって促進され、成果を挙げているのでございます。

一九八六年（昭和六十一年）四月、同志大学は田辺新キャンパスにおいて一、二年次学生の授業を開始いたします。同じ時期に同志社女子大学も音楽学科の全学生の授業と新しい短期大学部の開校を田辺校地で行うことになります。せめてその時までも先生にご存命いただきたかったと万感胸に迫るものがございます。しかしここにも天父のはかり知れぬご摂理のあることと存じます。

上野直蔵先生のご信仰もご人格もご業績も、言葉に尽くすことはわたくしには及びもつかぬことでございます。同じように先生とお別れした深い悲しみの情も言葉を越えたものでございます。今は、先生のお好きな讃美歌の言葉の通り、輝く御国にて主の御前にそのわざを嘉せられておられます先生の、御霊の上に永久の平安を衷心よりお祈り申しあげ、かつまたこれからの同志社を見守り給わらんことを切に希望いたします。天父のお導きのもと、遺されたわれわれは先生のご遺志を継承して同志社、さらには日本の私学の発展のために力を尽くしますことを深く心に期し、式辞といたします。

〈一九八四年十一月二日社葬式辞〉（同志社総長代行）

鼎談

上野直蔵先生を偲ぶ

駒井四郎（大阪女子学園理事長）
オーテス・ケーリ（大学文学部教授）
北垣宗治（大学文学部教授）

写真上から

北垣　きょうはお忙しいところをお集まりいただきましてありがとうございます。上野直蔵先生が十月二日に亡くなられてすでに二ヵ月半になりました。偉大な教育者であり、偉大な総長、理事長であった先生のことを、人間としてどういう方であったのかということをふくめて後世に伝えていく義務があろうかと思います。そこで上野先生を親しく存じ上げてきたものとしてこの鼎談の機会をもたせていただいたしだいです。

初めに個人的なつながりというところからスタートしたいと思いますが、ケーリ先生からお願いいたします。

個人的なつながり

ケーリ　私は長い間先生からかわいがってもらったものですが、いくらか近しくして頂くようになってからもう二十五年以上になります。それでいろんなことが浮かんできますけれど、こっちは先生のためにふつうの仕事以外には何もできなかったという気がします。手伝うことはいろいろできたし、仕事もいっしょにいろいろさせてもらったけれど、こっちから上野先生のほうに何かをする、ということがしにくかったですね。することがないんです。というのは、何かお返ししたいと思いながら、仕事を通してしかお返しでき

ない、そんな感じがあります。正月の元日に先生のところへうかがってみると、いろんな人があいさつに殺到してこられる。何かできたらと思って数年間、正月に先生をドライヴにお誘いしたことがあるんです。何回やったかちょっと忘れましたけれど、北垣さんもそのいっしょの一人で、たしか榊原胖夫君も加わったこともあれば、大下尚一君も加わったことがあって、北山とか、嵐山の上のドライヴウェイとかをまわったことがありました。また先生は何だかんだといって料理屋によく誘ってくださった。こっちは逆に料理屋へつれていくわけにもいきません。料理にくわしい人だったので、珍しいところを次々にみつけてつれていって下さる。とにかく何かしてあげにくい人でしたね。仕事のほうでしかお返しができない。そんな感じがするわけです。いかがでしょう。

北垣　駒井さん、個人的なかかわりのへんから……。

駒井　私が同志社へ来たのは昭和二十七年でありまして、ずっと学生部にいて、組合もやっておりました。上野先生との個人的な接触というのはその後十年間ほとんどなかったのです。大下角一先生が学長のときに上野先生は教務部長をやっておられたんですが、そのとき組合の問題で上野先生のところへ押しかけたことが一ぺんありました。そのときにはじめて話し合いというか、ディスカッションをした記憶がありまして、そのとき「駒井さん、私も組合の委員長をやっておりましたよ」というような話で、これは先輩だなと思った。そういうことがありました。

そして、どういうところから私を総務部長にされたか知りませんが、全然面識はなかったのです。昭和三十七年の六月に、駒井さん来てくれということで行きましたら、総務部長をやってくれということです。私もびっくりしたんですよ。全然そういうことを期待していなかったし、また上野先生と親しくなかったですから、どういうわけでぼくを総務部長にされるのか、ちょっとわかりませんがねと言ったことがあります。多分その一つの理由は、その時分私大連盟に学生補導の研究集会があって、私はそこへ行っておりまして、石田昭男事務局長と親しかった。石田事務局長あたりが、推薦といったらおかしいけれども、駒井君にしたらどうですかというようなことを何かのついでに言ったんじゃないか。ともかく総務部長になれということで、私は考えた末、お引き受けしました。それまでに私は上野先生の評判も聞いておりました。なかなかテクニシャンであるとのことでした。それで総務部長を引き受けるについては条件がある、ぼくの条件を出しましょう、あとからけんかするのは困るからということになりました。その一つは、こと財政に関すること、それからこと総務部長の権限に関することは、ほかの人が先生に要求されても、そこで先生はイエスというてくれるな、そうしたらぼくは仕事ができない、ぼくは先生が仕事のできるように十分配慮してやりますから、それは必ずぼくのところへよこしてほしい、そういうことを先生守ってくれますか、と言ったのです。先生は一寸考えて、「努力します」というご返事があり、それで仕事をいっしょにやったんです。仕事をやっている過程で、ぼくは案外上野先生というのは予想に反して直球投手で、カーヴをよう投げない人だということがわかってきました。ある意味ではぼくのほうが人が悪いくらいで、先生はパッと思いついたことをやるから、これはなか

なか直球投手だなと感じたことがあります。

そういうことで私は総務部長を前後十年間やっておりました。その間に学園紛争が挟まれておりましたから、前後六、七名の学長および学長代行という方たちのもとで仕事をしました。そのなかで上野先生はやはりボスというか――アメリカでボスといいますね、悪い意味でなしにいい意味で――実際ボスといえる人でなかったか。英文科の人たちが来て、先生が話しておられるのを聞いているとそれを強く感じました。ぼくにはわりかたソフトで、それもこちらから一目置かざるをえんといいますか、そういう人でしたね。

アーモスト大学名誉学位受章祝賀会

北垣　私は英文学科出身でありますので、一九五〇年に英文学科の学生になったときから上野先生のご指導をうけたしだいです。学生時分はたいへん怖い先生で、教室では学生たちはみんなひやひやしていました。当てられて、きちんと答えられないとずいぶん厳しく叱られましたし、予習していかないといけないし、ずいぶん不安な思いと戦っていて、教室で愉快な思いをしたことが記憶にないのです。ところが大学の三年生のときに近江今津に同志社英文学会の夏期キャンプに行きますと、上野先生は忙しいなかからちゃんと参加しておられまして、学生たちといっしょに遊ばれました。私はピンポンをして先生に負けたことを覚えています。帰りには、当時琵琶湖に浮かぶ最大の観光船玻璃丸にみんなが乗って浜大津まで帰りましたが、先生は全員になんでも飲みたいものを言えということで、みんなコーヒーだとかカルピスだとかを先生からおごっていただいて感激しました。北川弘君だけがそのときビールといって、ビールを飲んだのは彼だけでした。どうしてこういうことをされるのかよくわからなかったですけれども、敗戦後五年目というあのみんな貧乏でフウフウいっていた学生らをああいう形でまず激励されたということ、そうして考えてみると、そのスタイルはそのときだけのことではなくて、総長になられて最晩年に至るまで一貫していたというところがあります。

ぼくは新制大学の学生になる前に、旧制大学予科の最後の学生でしたけれども、そのときに夏期大学というのを同志社大学が開きまして、その「夏期大学長」は上野先生であったと記憶しています。致遠館の二階で発会式が行なわれたのですが、そこで上野直蔵夏期大学長があいさつをされまして、その時先生がおっしゃったことで今でも覚えていますが、外国語というものはゆっくりのんびりやるという人もいるが、私にいわせると、とくに第二外国語というものは短期決戦がいいんだ、短い期間にうんと集中してやることがいい、自分の経験からそれはいえるんだ、とおっしゃいました。そういうふうに先生は外国語教育に関してはいろんな面で熱を入れてこられた。先日聞いた話でありますけれども、お若い頃の先生は、ドイツ語を勉強したいという学生がいますと、ご自分で教科書を探し

てきて、教えてやるから来いといって、ドイツ語の個人教授を学生のためになさったということです。そういうことはなかなかできるものじゃないなという気がしております。

大学院に入ってようやく一対一でお話ができるようになりました。大学院での修士論文は、当時の学生は全部上野先生に目を通していただいた。先生が綿密に手を入れてなおして下さり、それから提出したものです。ぼくはいま大学院生を指導していて、基本的にはやっぱり同じやり方で指導しているのだなということを感じるしだいです。そして大学院を出て修士となりましてから早速助手にしていただきました。結局自分の今日あるのは上野先生のおかげである、それはどう考えても否定しようがないというふうに思います。

上野先生は礼儀正しい人で、したがって服装についてもきびしいところがありました。学長室や総長室にお訪ねするときは、上着にネクタイをきちんとつけてないと、入りにくいわけです。アメリカ研究夏期セミナーは先生の残して下さった遺産ですが、初期の一九五二年、五三年のころには冷房というものは全くありませんでした。どんなに暑い日でも先生は背広にネクタイをしめて出てこられました。一九五五年の夏に木村俊夫先生とぼくが英文学科で戦後はじめて在外研究に出かけることになった時、英語専任者の方々が萬養軒で送別会を開いて下さいました。ずい分むし暑い夜でした。その時上野先生や吉岡義睦先生はきちんと背広にネクタイでした。その時先生は声を荒げて、この送別会には、上着をきてない者がいる、と言われた。ぼくはネクタイはしていなかったのですが、上着は何とか着ていて、叱られずにすみました。学長になってからは、こういうことはやかましくいわれなくなったと思います。先生にはやせがまん的な要素もあったのです。冬どんなに寒くてもパッチははかない先生でした。ネクタイは先生の趣味でしたが、ぼくの目から見ても、地味なものが多かったと思います。或る冬の日に空色のネクタイをして学長室にうかがうと、「君、そのネクタイじゃ寒いなあ」といわれたことがあります。先生は肌の上にじかにワイシャツを着る主義で、しかもワイシャツは白に限り、色のついたワイシャツをきておられるのを見たことがありません。

そこでいかがでしょうか、駒井さん自身しょっちゅう上野先生から英語をならっておられた。そのへんのお話を……。

英語の先生

駒井　それはこういうことなんです。昭和四十三年に私英国に勉強に行きまして、そのときに私のテーマとしては、英国のユニヴァーシティ・グランツ・コミッティーのこと、国庫補助の問題、当時日本においてはまだ国庫補助というものはあまり宣伝されていなかったのですが、そのときにどうしても私は将来私学としてはそれがなければいかんということを感じました。それから英国の行政機構といいますか、これがわりかた日本の私学に似ているんですね。英国はご存じのように財政的には国立みたいなものです。けれども教育行政については国は私的次元にゆだねているわけですね。直接干渉しないということで、おのおのの大学にチャーターというものがありまして、日本でいう寄附行為ですね。それによって独自の規定を作って運営しているということです。

もう一つ、世界的に教育行政の流れを見ますと、国家的公教育のところと私的自由教育

という流れがあるわけですね。それがアウフヘーベンしていくという過程にあるわけです。それのモデルはやはり英国ですね。しかも英国においてはそういうことで直接国が大学をコントロールしないということで、U・G・Cというものをつくってそこをクッションにしているわけですね。そういうことで興味があったものですから私は英国に行くということにしました。そのとき上野先生はどこから探してこられたか知りませんが、ロビンズという人が委員長であった、日本でいうと中教審みたいなものですね。英国の高等教育をどうするか、その部厚い報告書があるんですが、それをぼくに下さって、君、これ読みなさいということで、私は行くまでにそれをずいぶん読みました。だいたいシステムのいろんなこと、それから今後英国がどういうふうに大学教育をするかというふうなことで、そういう背景をもって英国に行ったのです。

私が渡英したとき、ちょうど先生も英国に行っておられたのです。朝早く七時ごろ飛行場に着いたのですが、先生はちゃんと空港まで迎えにきておられた。ロンドンの宿屋から空港までだいぶんありますが、迎えにきて下さった。私ははじめての英国ですから、先生がおられて非常に心づよかったことを思い出します。そして上野先生は「駒井さん、英国に来たんだからやっぱり学校に行きなさいよ。ぼくも学校へ行っているんだ」といわれる。私は学校へ行くつもりはなかったんですけれども、先生のアドバイスでもあるので、そうですかということでそれから英国の学校へ行きまして、時間が惜しいですから個人で週二回通いました。上野先生も個人教育で、先生、何しているんですかとうかがうと、いや、いろんなことをディスカッションしているというようなことでした。私もそういうことで週に二回通いました。

英国から帰ってくると、上野先生は「駒井さん、あんた英国へ行って多少英語を勉強したんだから、続けてやりなさいよ」といわれた。何クソと思ったんですよ。よし、おれは英文科じゃないけれど、負けるものか、やれるだけやってみようということで、そのときから少しずつ英語を勉強した。毎日英字新聞を読む。今でも英字新聞は読んでおります。英字新聞は必ず読む。それから英語の勉強をする。それは上野先生のサジェスチョンによるといいますか、そういうことで、ぼくには非常にありがたいことです。実は初めなにか皮肉をいわれたようで、ちょっとムッとしましたけれども、おれだって英語をやれるんだということで、奮起してがんばってきたわけです。

ケーリ　それは上野先生が学長になられる前の外遊じゃないんですか。

駒井　あとです。つまり四十三年に私は英国へ行ったのですから。

北垣　ケーリ先生、上野総長をアメリカで案内なさったときの話なんかを。

ドアは常に開いていた

ケーリ　私、家内と同志社にやってきたのは三十七年前になります。いちおう予科のほうに籍をおき、文学部のほうでも一科目やれということで、お手伝いしていたんです。先生はチーム・ティーチングということでうちの家内をスカウトし、家内をスピーカーにして、何か新しい試みの科目を学部のほうで設置されました。そこでアリスを買ってくださって、それは一、二年続いたようにぼんやり覚えているんですけど、それがまた家内には

日本の大学生、また大学の問題というものに対するいい入門になりました。だから最初のころは家内のほうが私よりも上野先生をずっとよく知っていたわけなんです。

それから十年くらいたってからでしょうか、まだ教務部長のころに、先生はアメリカ研究夏期セミナーをもっとがんばろうじゃないかということで、ロックフェラー財団から京大と同志社がひきつづき金をもらうことになって、そしてアメリカ研究所というものをつくろうということで、どういうことで私を買って下さったのかわからないけれど、まだそのころは私は助教授だったような気がしますが、アメリカ研究所の憲章式のものを翻訳させられたりしました。上野先生のところに呼び出されて行ってみると、先生は自分で鉄筆とってガリガリとあのころの謄写版の原紙を切っているところだったんですね。これだ、訳せということで、それから京大と同志社の委員が協力して長い間やることになったわけです。そのとき私も委員をしていたし、大いに育てて頂いたわけです。そのとき先生はまだ教務部長だったはずです。それからしばらくたって学長になられた。アメリカ研究夏期セミナーならびにアメリカ研究所がひとり立ちできるように育ててもらったわけですけれど、そういうことに私はまき込まれて、それ以後、連絡しやすい関係になっていった。私としては他のことでしょっちゅう行っていたわけではないけれど、いつでも行けるということで、英語でいうと、His door was always open というふうな感じで、用事がないと行かなかった、とは言いたくないんだけれど、しかしある意味で忙しい人だったから、ただぶらっと敬意を表しに行くようなことは私ひかえたつもりです。だけれど、またひっぱりだしてご馳走してくださったり、そういうところで励まされたり、そこでは用事以外のことをいろいろと雑談したりしたわけです。

学生の世話

北垣　いまのお話にあったように、上野先生は人の世話をよくするという点ではほんとうに徹底した方であったと思います。はじめてそういう意見を耳にしましたのは、今井仙一先生という、上野先生の若い頃からの親友ですけれども、今井先生とはじめてお話したときにも、「上野君は徹底的に自分の学生のめんどうを見るからね」と言っておられました。そのとおりだと思います。先生がめんどうを見てこられた範囲というのはどれくらいのものであるか、いまだれ一人として正確に全部を把握することはできないだろうとぼくは思います。もう一つの言い方をすれば、先生は非常によくはがきを書かれた方で、駒井さんもケーリさんもいろいろのところからはがきをもらわれたと思いますが、例の花模様の私製はがきに十行ぐらいにいつも激励のこ

アーモスト大学名誉学位受章祝賀会

とばが書いてあるわけですね。何も意味のない、いま東京に来ている式だけの場合もありますけれども、しかしたいていの場合は激励をこめて書いてあったわけで、そのはがきがどの範囲まで、どなたが何枚くらいもらっていたのか、だれも統計とるわけにいかないし、簡単にはとれないんですけれども、ぼく一人だけでも何十枚でしたからね。そういったことで、実は太田藤一郎先生宛の上野先生のはがきと、太田先生の出されたものとの往復書簡集が活字になっているのです。それを読んでみるだけでもなるほどと思い知らされます。お二人の間では季節の花をめぐる対話が多いわけです。いまアヤメが咲いたとか、キキョウが美しいとか、ウメはもうちょっと早いとか、そういう話が多いですけれども、ああいったことを通して自分の古い弟子との間に心をかよわせるということを愛した方だと思います。それともう一つは、早う博士論文を書けというようなことを何度もしつこくいわれました。とうとう書き上げて提出したときに、「ようやった。きみに何度もああいったことを書いたけれども、あれを書いたのはきみだけではなかった。何人かに書いたけれども、やっときみが書き上げた。」こういうふうにおっしゃったことを思いだします。

もう一つの例をあげますと、大学設置のことにかけては先生は権威でしたから、徳島文理大学のごときは、先生をもっとも重要なアドヴァイザーとして人員構成を図っておられたような面がありまして、英語の先生のほとんどは先生のお世話で同志社から行くようになって、いま十人以上の英文科の出身者が行っております。こういう人がおりますが、ひとつなんとかなりませんかと申し上げたら、わかったということで、すぐ履歴書を持ってこいといわれ、その人を徳島に送ってくださって、その人達はどんどん採用されていったわけです。徳島文理大学を訪れたとき聞きました。英語の会議を開くとそれがまるで同志社の同窓会のようで、同志社出身以外の人は、なんだ、また同窓会かと皮肉をいっているそうですが、そういうふうなことまでしてくださった。それは徳島文理大学だけではない。上野先生が開拓してくださったのは梅花女子大学がその一つですし、あるいは帝国女子大というのもありますね。ほかにもあるわけですけれども、そういったことでみんなお世話になってきたわけです。

学長当選の時

ケーリ　私もいただいたハガキは何十枚とまでいわないけれども、十数枚まだどこかにあるはずです。思いだすんですが、戦前はもちろんシカゴ大学に留学されたわけですが、一九六〇年にヨーロッパ・アメリカをまわっておられたときに学長に当選されたんですよ。それを先生に知らさなければならない。そしたらどういうわけか、たしか園部さんがアーモスト館の私のところへやってきて、いま上野さんどこにおるんやろ、ケーリさんしか知らないらしいという。そのときたしか松山信直君がブラウンに行っていた。それともデュークのほうのサマースクールだったかな、だれが行っていたのかな。

北垣　秋山健君が……。

ケーリ　そう秋山君が行っていた。松山君か秋山君を通して、何しろ向こうでなんとかつかまえなければならないということになった。こうして網をはって、電報を打ったことがあります。なんで電話を使わなかったのか。電報のほうが残るから、それでやったの

か、ちょっとぼんやりしていたのか。のんきというか、先生にもそういうのんき式なところがあって、成ることは成るので、なにも姿をくらますというわけではないけれど、ちょっとそんな気がするんですがね。

北垣　いまのお話は松山君からも聞いたことがあります。松山君と秋山君とがニュー・ヨークのラガーディア空港で上野先生をつかまえようと待ちかまえていたら、ショルダーバッグ一つだけで――先生はショルダーバッグ一つで海外旅行されるんですね。だからバッグには最少限のものしか入れておられない。それでひょろひょろと出て来られた。松山君がいったんデュークに帰ったあと、上野先生あての電報が届いた。それには「ダイガクチョウニトウセン、ゴショウニンヲコウ」とあった。これは「ゴシュウニン」のまちがいではないか、ということで、先生はそれからすぐ秋山君のいるミシガンに出発された。ミシガンについている電報と照合する必要もあったのです。とにかく先生は、これはえらいこっちゃということで、たしか予定をくり上げて帰ってこられたのだったと思います。

アーモスト大学名誉学位受章祝賀会

ケーリ　ほかの人だったら、そんな可能性があるならば、旅をしているんじゃなくて、どこか箱根ぐらいに行っているかもわからないところですね。

北垣　駒井さん、授業料値上げにかかわる話をひとつしてください。

駒井　授業料値上げのときには私もいっしょに学生に囲まれたり、つるし上げられたりしてやっておりました。上野先生のえらかったのは、そういうときでも泰然自若として受け答えをされていたことですね。ぼくはその連中はみな知っていますけれども、その連中はあとでみな上野先生を尊敬していますよ。上野先生にあのとき無理いったけれどもと言っていますね。一度同志社の北小松……

北垣　唐崎ハウス。

駒井　唐崎ハウスから北小松へ行った。そういうことで囲まれたことがありますが、そのとき先生と秦理事長とがつかまった。しかし泰然としてやっておられたですね。そのことは今でも印象に残っていますし、また卒業した学生が、やっぱり上野先生はえらかった、わしらのようなものでもちゃんと扱われたといって喜んでいるといいますね。そういうことだと思います。

　それからぼくが上野先生ちょっと酷だと思ったのは、駒井さん、梅花で時事英語を教えろというんです。まさかぼくが英語を教えるなんて全然考えてもいなかったですわ。これはえらいことになったと冷汗をかいて、ぼくの英語は耳から入った英語とちがうでしょう。活字で入った英語ですから、発音なんかそれこそ全然だめで、ようやく読めて意味がだいたいとれるというくらいですから、それを時事英語をやれというんでしょう。それでだいぶん苦労しました。しかしその時代から言うているんですが、ぼくは上野直蔵、ケー

リ、北垣、この三人をただで先生にしているんだ、ぼくの英語はたいしたものだと言ったことがありますけれども、実際ときどきケーリ先生にも北垣さんにも、これはどうやということを質問したことがあります。往復の電車の中で英語の本や新聞見ながら字引きを引くということは勇気が要りますよ。やはりわかったような顔をしてみたいですからな。けれどもパッと字引きひっぱって恥かいても努力せなあかんということを今でもたえず認識をもってやっています。

ロンドンでの先生

それから、ぼくは教育行政者としての上野先生の面にだいたい接しておりましたが、英国へ行ったときに、先生は毎日下宿からふろしきに本を包んでブリティッシュ・ミュジアムの図書館に通われた。あそこは世界的にすばらしい図書館らしいですね、ぼくの宿屋がその近くにありまして、先生はときどき寄られるのです。そやからぼくも、先生きょう来るかもわからんから勉強してなあかん(笑)、ということで、そういうことがありましたけれども、そのときは上野先生の学者としての姿といいますか、毎日ふろしきに本を包んでコツコツと行かれる。そこでぼくも一ぺんブリティッシュ・ミュジアムの図書館というのはどういうところか、あの券はなかなかくれないんですよ。それで京都の英国文化センターの紹介で入場券をもらったのです。ぼくはなにも勉強するつもりじゃなくて、世界から研究者、学者が寄って勉強しているというから、どういう顔をして何を研究しているのか、雰囲気を味わうために行ったことがあります。そしてぼくの関係の書物についても多少向こうで貸してもらって読んだことがあります。あのときに上野先生は、内容はよくわかりませんが、中世の英文学のことを研究されておったのだと思います。ぼくは内容についてはわかりませんので言えませんけどね。あのときに上野先生の教育行政者以外の、学者としての姿を見たような印象でしたね。

北垣　あのときはたぶんチョーサーの『トロイラスとクリセイダ』を勉強しておられたんだと思います。その後一九七二年に南雲堂から『チョーサアの「トロイラス」論』を出されました。たまたま一九七二年の夏にぼくはイギリスにいきましたが、ブリティッシュ・ミュジアムへ行ってチョーサーの絵葉書を買ってきてくれと先生から頼まれて、それをお送りしたことがあります。あの図書館での先生のプロジェクトの一部分はチョーサー研究だったはずです。

駒井　そのときに私はチョーサーを知っておればお尋ねしたんですけれども、残念ながら、チョーサーという名前は聞いていたけれども、チョーサーがどういう位置づけか全然知りませんから、そういう点については先生とディスカッションはできなかった。

ケーリ　有名なチョーサーの『カンタベリ・ティルズ』というのが一番の代表作らしいのですが、とにかくいちばん知られているものです。ぼくがほんとにたまげたのは、ロンドンの郊外からカンタベリまでの十四世紀の話なんです。距離にして五十五マイルだけれど、先生はその道をわざわざ探しだして歩いたわけです。私はそれをあとで聞いたんだけれど、今は歩くところじゃないんですね。高速道路はたいへんな込み合いで、つい二年前にその辺を通ったんですけれど、あれは二十何年前の話ですから何ですけれど、しかしよくもあんなところを歩かれたものです。たし

か四日間かけられたようです。

北垣　チョーサーの『カンタベリ・テイルズ』の日程に合わせて歩かれたのです。

ケーリ　そう。だから物好きというか、ちょっと危ないというか、ほんまかいなと言いたいくらいのところです。ほんとに今は歩くような所じゃないんです。だけど、あの人の履歴に合わせてみると、ほんとうにやりそうなことなんだね。

北垣　そしてどういうわけかアーモストのプリンプトン総長がチョーサー・ソサエティのメンバーでして、あの人は医者であって教養人ですから、チョーサーの勉強もしていたんですね。それもあって上野・プリンプトン両総長はウマが合って、おそらくいちばんウマが合った総長同士でしょうね。そして上野先生は一九六〇年の七月一日から大学長に就任されたと思いますが、ちょうど全く同じ日にプリンプトンがアーモスト大学総長に就任している。あとで調べたらまったく同じ日です。偶然ですけれど。ですから上野先生の話のなかに、プリンプトン先生はどうしているかというようなことがよく出ましたですね。

先生は飛行機に乗ることが怖くないという、あの年でちょっとおもしろい、悟ったようなところがありましたですね。ですから学長、総長時代に東京に行かれるのに飛行機をよく利用されました。なにか事故で落ちた飛行機のその次の便に乗るというのは、先生でも気味が悪かったらしいですけれども、そういうこともあったことを思いだします。ぼくが生まれてはじめて飛行機に乗ったのは、上野先生の学術会議の選挙のときです。たしか一九六五年の夏でした。金沢の小松飛行場から東京までお伴して全日空機に乗せてもらいました。おまえは初めてだそうだから窓際に坐れということで、先生は通路側に席を取られて、東京までご一緒したことを思いだします。

変な言い方ですが、上野先生に大学長になってもらおうということをいちばん早く言い出してがんばりはじめたのは桜井忠一先生でした。桜井先生が貞方敏郎先生のお宅を選挙事務所にして、そこでいろんな人に電話をかけはじめて、おまえも来いということで、私はそのときから上野先生のための選挙参謀のような働きをするようになりました。日本人には選挙は汚いものだという漠然とした意識が昔からあるように思うんです。民主主義の世の中では選挙は必要なことなんで、恥ずかしがってはいかんということを教えたのはケーリさんで、上野先生という人が上におられたので、結局選挙のたびごとに走りまわるようになりました。でも、上野先生以外の人だったら私はそんなことしただろうかと思うと、やはりこういうめぐり合わせだったのですね。選挙を通して人生勉強を大いにさせていただいたと思っています。

それから上野先生が非常によく世話をなさる人だったということのもう一つの例をいいますと、これはなにも英文学科の卒業生に限らなかったということです。外の学部やよその大学の人でも、これはと思う人を上野先生は世話をされましたし、さっきの例ですけれども、一九六〇年にニューヨークに行かれたときに、法学部の卒業生で、新島スカラだった藤倉皓一郎君がニューヨークでアルバイトをしていました。上野先生はどういうふうにして会われたか知りませんが、いっしょに食事をしていろいろお話をしてくださって、彼に三〇ドル渡して、これは君のための奨学金だから取っておいてくれといわれて、彼は非

常に感激していました。当時の三〇ドルというのはたいした金でした。こうして、隠れたところでいろんなことをしてこられたと思います。

ケーリ　別れるときに渡して行ったんじゃないですか。

北垣　くわしい状況は知りませんけれども。

ケーリ　それだと思います。ぼくは二五ドルと覚えているけれど。

北垣　先生の個人的なお金の使い方は、私がいくら逆立ちしても真似ができないという一つの例をあげますと、先生は髪の毛の少ない方だったので、散髪代が安くていいと思ったら大間違いです。上野先生にいわすと、髪の毛が少ないからこそ散髪屋には一週間に一回行くんだ、と。そして散髪屋に対していくら渡される、かというと一万円をポンと出して釣りは要らない。ご入院中は病院に一週一遍散髪屋を呼んで一万円渡される。これは真似のできんことです。また多くの人が真似したら破産すると思います。でも、それは見えを切ったとかそういうことじゃなくて、あれはつまり若いときに非常に苦労をして、金の値打ちを知っている人だからこそ、ああいう散髪という職業に携わっている方々の気持ちをおもんぱかっての行為ではないかという気がしてしようがないんですね。これはどうしてもぼくの真似のできんことです。

強力な後ろ盾

それからもう一つ、上野先生に感謝したいと思いますことは、同志社の『百年史』がああやって通史編二巻、資料編二巻、計四巻が完成しましたのは、上野先生が後ろ盾になってよい委員会をおつくりになり、それから社史資料編集室というものをここまで充実させてくださった。そこへ河野仁昭さんというほんとに適任の人材をみつけてそこへ置いてくださったということ、私は河野さんとあそこにいる人たちのことを「河野マシーン」と呼んでいるんですが、その河野マシーンをつくってくださったということですね。これなしには『百年史』というものはできなかった。またその『百年史』を完成した余勢を駆っていま『新島全集』をやっておりまして、ケーリ先生も私も加わっております。亡くなられるまで『新島全集』のきみの分はどこまで来ているかということをたえず心配して聞いてくださった。第十巻ができ上がったら上野先生に捧げたいとすら思っているわけです。アメリカ研究所はさきほどケーリさんのご紹介のとおりですし、上野先生の残されたものはそのほかにもたくさんあると思います。上野先生なしには、このキャンパス内の樹木もだいぶちがったものになっていたんじゃないでしょうか。ここに何をもってきて、あそこに何を植えるということにも、ずっと関心を払ってこられました。

ケーリ　サインが少しとれてきているけれども、植物の名前を書いた札があるでしょう。あれやはり上野さんがさせたことだとぼくは聞いています。

北垣　それから大学会館がやっぱりそうですね。大学会館はあれだけでかくて、できたときは日本一の大学会館といわれまして、学内からも大いに批判が出たのですけれども、学生との間にうまく約束をかわして大学会館が出発できた。それの使い方に関して大学と学生との間に了解がつかなくて、長年の間使わないままに放置していたというばかげた例が関東にはいくつかあったことを知っていま

すが、同志社はそういったこと一切なしにスタートした。そのとき駒井さんは……。

駒井　大学会館を企画してやったのは実はぼくなんです。あの当時、つまり大学生活というのは教室だけのものじゃない、やはり課外のいろんな活動といいますか、休む場所、あるいはディスカッションする場所、そういう施設が大学の教室以外に必要だということで、学生会館という問題が日本でぼつぼついわれだしたんです。そのとき私少し学生会館の問題について研究しまして、あれは学生というよりもむしろ学生部が提起した問題なんです。その当時図書館も必要なんでして、図書館をやるか学生会館をやるかということで評議会あたりで論戦があって、そのときに上野先生の勇断といいますか、そういうことで学生会館をつくった。その当時としては日本でもっとも大きな近代的なものだったんですね。そういうことにおいて同志社はほんとうに学生のことを考えて一歩先にやるということでやってきましたね。それで学生部は先生たちから批判をうけたことがあります。学生部というのはなにか金を使うようなことばかり、たとえば生協をつくったのもそのときの学生部で、それから学生の健康保険をつくったり、カウンセリング・センターをつくったり、ちょうど日本でそういうS・P・Sという問題が出てきたときですね。

田辺キャンパスの着想

それから、いま言われたように、上野先生は同志社を将来どういうふうにもっていくかということについても構想をもっておられましたね。よく学生が田辺問題をやるときに、十一学部五万人構想ということをとりあげていましたね。あれも学生の一つの反対のスローガンで、先生はそういう構想をたしかにかつてはもっておられた。田辺を手に入れたときも、実は最初は瀬田の向こうに松下電器、そして滋賀病院がありますね。あの付近一帯にぼくは目をつけたんです。ぼくのふるさとの近くですからね。そしてあの当時部長連中をたくさんつれていきまして、上野先生もいっしょで、それであそこの交渉をやりだしたことがあるんです。そしたら、その当時の市長が汚職しまして新聞に載ったわけです。これはあかんと思ってそこをあきらめて、そして田辺に転換した。それで、買うのは上野先生が学長を辞められてから、秦理事長が学生となんとかかんとかいって買いましたけれども、そのことの発想というのはやはり将来のキャンパスという問題で、上野先生が早くから着眼しておられましたし、われわれもそう思ってあれを買った。それがいま同志社にとって非常に大きな力になっているんじゃないかと思いますね。

上野先生が学長でなかったら、それまでの構想というのは、言うことは言っても実現できておらなかったんじゃないでしょうか。同志社国際高校にしてもそうですね。上野先生がおられたからできたのであって、いままでの『百年史』『新島襄全集』、ああいうものも上野先生がおられなかったらできてないでしょう。やっぱり指導性によってああいうものができたと思いますね。

それからもう一つ、最近ぼくは気をよくしたのは、こんどこういうことを文部省がやっているんです。議会なんかで私学の問題がいろいろあるでしょう。その運営調査会というものをつくっているんです。今後五、六年のうちに全国の大学をその委員がまわるわけです。まわって指導するといいますか、二十何

校のうち私のところがトップに上がっていて、十二月の四日に来たんです。その委員のなかに橘高という私立大学協会の会長ですが、上野先生にいろんな会合で前に会っていますから、上野先生の話が出て、調査をしないで上野先生の話ばかりしているんです。そして上野先生がかつて理事長をしておられた学校なら間違いないでしょうということで終わった。われわれはそういうことで先生の恩恵をうけたということも、ごく最近ですがありました。

アーモストの名誉学位

ケーリ　そのへんのことは私は横から聞いているほうなんですけれど、ぼくちょっとうれしかったのは、一九八〇年に上野先生にアーモスト大学が名誉学位を贈ることになった。それは卒業式に出席しないともらえないものなんで、それにお伴することができたのは何よりものことだったのです。実はその話が出たのは、同志社の予算が決まってしまったあとで、総長の外遊のそれとしては予算がなかったわけです。だから寄せ集めてこなければならなかった。ぼくはアーモスト大学から呼ばれて、おまえ案内して帰ってこいということで、ぼくの旅費はアーモスト大学が払ってくれたんだけれど、付き添い役をさせてもらってほんとにありがたいと思いました。だけど、あの時は先生ご夫妻も飛行機の座席がファースト・クラスでなくて、安いやつをみつけておつれしたわけなんですよ。先生はなんともいわずがまんをされました。私は家内もつれていったんですけれど、アーモストでの行事で介添えの案内役、おつれ役を式のときもつとめることができました。アーモストではいろんな行事がありましたが、実際の式とその前日とがだいじでした。アーモストに三、四日くらいいたものですから、新島襄が五千ドル集めたラットランドのほうへお誘いしたところ、先生も喜んでぜひということで、小さなレンタカーでおつれしたわけです。そのときは久子夫人はヘアドレッサーか何かに行かなきゃならないということで、アーモストに残られました。ラットランドまでおつれし、帰りにはウイリアムズ・カレッジに寄って、これで三〇〇キロぐらいだったと思います。往復するともっとですからね。ちょうどいいひとときだったのです。

1980年5月25日アーモスト大学名誉学位受章式

アーモストの名誉学位については、アーモストでもいろいろ工夫して、できれば同志社百周年の年にでも、と念願していたんですけれど、そうはいかなかったのです。ようやくアーモスト大学のほうから、ぜひ来て受けてくれという手紙が来たときに、さっそく先生のところへ行って、いろいろ日程とかその他を相談することになりました。私は一つお願

いがあります、と言いました。つまり、先生はあの光った頭で和服がよく似合うので、式のときは羽織袴で出席されたらどうかということを提案するつもりだったのです。そしたら、いや、もう羽織袴は送っておいたよということで、さすが上野先生だ、と思いました。これはよほど上手にいわないと、ほかの名誉学位受領者はみんなガウンだのに、ウンといって下さるだろうかと心配していましたところ、逆に先生の方ですでに頭はそっちへまわっていて、発送しておいたといわれたことが非常にうれしかったというか、よかったと思うんです。

1980年5月25日アーモスト大学名誉学位受章式

そのようなおともをしていてはじめてわかったことは、よく、先生は足もとがふらつくようにいわれていたけれど、その原因は先生の視力にあったのではないかということです。片側の目はほとんど見えなかったようです。いくらか見える方の目も、晩年にはコンタクト・レンズをはめた上に眼鏡をかけておられた。先生には時々階段から落ちたという話がありますが、あれは先生が常用された睡眠薬のせいというよりも、目のせいだったのではないでしょうか。アーモスト大学でも、新島や内村に深い影響を与えたシーリー総長は、上野先生と同じで、片方の目はほとんど見えなかったのです。上野先生は片方だけの目でよくあれだけ手紙を書き、仕事をしてこられたものだとたまげるばかりです。

ぼくもう一つ言いたいことがあります。アーモスト館の奥の所に、昔、此春寮があった所に、三年余り前ですけれど、無賓主庵というのが加わったのです。それは今熊野のほうに住んでいた、英文学科を卒業した私ども最初のころの学生のおじいさんが、あそこに飛騨から移築してきた茶室なんですけれど、それがどうしてもその土地を売ってそこを片づけなければならないので、ほしければ私にあげるということになり、私はどこにも置くところがないし、あそこに寄付してもらえたら、というようなことで、それで上野先生を一度今熊野までお連れしたのです。そうか、これか、ということで、ちょうどこれまた同志社の百周年の記念事業に一つ織り込んで、その費用まで先生はめんどうを見てくださいました。

それでぜひ言いたいのは、上野先生はいつもavailableだった、ということです。たえずその場におられるんですよ。京都におれば事務時間にはちゃんと総長室におられる。だから行くことができる。つかむことができるんですよ。キャンパスが不穏なときだと女子大のほうかもしれないけれど、しかし京都におられるかぎりはちゃんと来ているんです。仕事から逃げる人じゃなかったのです。そこがありがたかったし、偉かったなと思うんです。

抜群の記憶力

北垣　先のことに早く頭が働く先生だったわけですが、同時に過去のことをいつまでも忘れない記憶力という点でも、まったく感心していたわけです。先生は結婚式で仲人をたのまれますと、新郎新婦の生まれた日、そし

てどの中学校、どの高校、どの大学、それから卒業の年、全部暗記していかれるんですね。メモを見ずにみんなの前で披露なさるくせがありました。あれはあまり人のやらんことでありまして、たいした芸当だと思っています。私も時として真似をしてそれをやりますと、新郎新婦の両親などがびっくりもし、感激もされます。あれは上野スタイルで、いいやり方だと思っています。

先生は、ことしの四月十一日だったと思いますが、若王子へ登られまして、そのときに同志社共葬墓地において、文学部名誉教授の滝本二郎先生と、工学部教授の竹内貴一郎先生と、それから同志社教会の名誉牧師茂義太郎先生と、その三人の納骨をなさったんですが、そのときに式辞でその三人の先生の経歴、生年月日、どの学校を出たか、どういう仕事をしてこられたか、それを全部メモなしでいわれました。八十三歳で、それが若王子の上まで上がってやられたのです。先生のエネルギーだけでなく、深い使命感のようなものがそこにありありとあらわれていたと感じました。

そういったことで、そろそろ時間なんですが、上野先生が同志社を愛し、そして国公立に対して私学を守り、関東の諸学校に対して関西の学校を守り、そして教育精神に燃えていい大学をつくろうとがんばってこられたことは私たちみんな知っていますので、できるだけその志をこれから先き、二十一世紀に向けて生かしながら、駒井先生には駒井先生のいまの大学をがんばっていただきたいし、ケーリさんや私は同志社でまたがんばっていきたいと思うしだいです。今日はこれで閉会にさせて頂きます。有難うございました。

（一九八四年十二月二十日収録、於有終館担当理事室）

田辺校地起工式

一月九日（水）真冬にしては、珍らしく無風・快晴の田辺校地において、午前十時から「同志社大学・同志社女子大学田辺校地教育研究施設建設工事起工式」が京都府知事・田辺町長及び校友会長の御出席のもとに、学内関係者、設計・施工業者関係者約二百五十名が参列し盛大なうちにも厳かに執り行われました。

式は、園部望本部庶務部長の司式のもとに、鶯渕紹子女子大学教授の「目覚めよと呼ぶ声あり——wachet auf, ruft uns die Stimme——J. G. Walter 作曲」オルガン奏楽で始まり、讃美歌斉唱「二一〇番教会献堂式」、石井裕二大学神学部長の聖書朗読並びに祈禱、河合璋本部財務部長の経過報告のあと、木枝総長代行は式辞で、府関係者、町関係者へ感謝の意を述べられたあと、今はなき上野先生へ起工式の報告と感謝の念を捧げられた。

更に、同志社創立一一一周年を来年に迎え、同志社関係者は、キリスト教主義をもって徳育の基本とし、知徳体の統合的人間教育を施し、良心を手腕に運用する有為の青年男女を社会に送り出すという創立者新島襄先生の教育理想を実現することによって皆様方のご期待に応えるべく、情熱をもって努力を積み重ねていきたいと決意を表明された。

そして地元のご支援と工事関係各位の協力のもとに来年の三月には予定通りに完成する事を願われた。

続いて、林田悠紀夫京都府知事、原田喜代次田辺町長、巽悟朗同志社校友会長の祝辞、これからの工事の無事を祈って木枝燦理事長代行、岡野久二女子大学長、林田悠紀夫京都府知事、原田喜代次田辺町長、巽悟朗同志社校友会長、設計・施工業者の順で「鍬入」が行われ、岡野久二学務理事・女子大学学長の挨拶のあと、山本文雄女子大学総務部長の祝禱、奏楽で式典は十一時十五分とどこおりなく終了しました。

上野先生の想い出

安藤良雄

上野先生の古希祝賀会（右から三人目が筆者）

私が上野先生をはじめて存じ上げたのは、一九六二（昭和三十七）年大学基準協会の理事会のメンバーに加わった時でした。大学基準協会というのは、日本における大学の水準向上をめざす団体（本来は戦争直後アメリカに習って政府から独立して大学設置の基準を定める機関としてつくられたものでした。なお、この協会への加盟には、文部省の「大学設置基準」よりきびしい条件で審査されることになっています）ですが、現在でもとくに我が国において国公私立の大学を網羅した唯一の団体という独自の存在意義を認められています。理事は原則として、大学の総長あるいは学長ですが、当時私が就職していた東京大学の場合は、総長が国大協の会長に就任する慣例があるため、一教授である私が基準協会への代表となり理事会メンバーに加わっていたという事情にありました。したがって私は錚々たる大先生方の中にあって、長老方の風格や味わいのある謦咳に接し、非常に勉強になりました。しかしながら大学には別に国立大学協会、公立大学協会、私立大学三団体（「連盟」「協会」「懇話会」の三つ。現在ではもう一つふえて四団体になっています）があり、大学の利害についての対社会的発言はこれらを通じて行われていたこともあり「基準協会」はどちらかといえばサロン的雰囲気でした。

上野先生は、この基準協会で、常務理事、会長をつとめられましたが、理事会がサロン

的会話だけで終るのにはあきたらず、いろいろ重要な問題を提起され、これを検討し文書にまとめ、発表する方向に導くことに尽力されました。この間、筆をとってドラフトを書く作業は、おのずから、理事会中とびはなれて若かった私の仕事になりました。このため私は常務理事として、ついで副会長として上野先生をおたすけする機会が多くなりましたが、上野先生が常に日本の大学の現状と将来について、きびしい見解を示されるのには、大いに敬服しておりました。そして、私は上野先生のそのようなお考えをひそかに「上野ライン」となずけて非常にたのもしく思っておりました。

「上野ライン」は「基準協会」だけにはとどまりませんでした。文部省の大学設置審議会でも同様でした。この審議会のメンバーの半数は基準協会の推薦によって任命され、会長は無記名投票によって選ばれるという官庁の審議会としては異例の存在です。こゝでも私は上野先生と同席するという光栄に浴し、とくに上野会長のもとで副会長に指名され上野先生を数年間おたすけしました。そして、この審議会でも上野先生は安易な運営を潔しとされず「上野ライン」を貫かれました。これは歴史に残る上野先生のご功績だったと思います。私は上野先生のあとを襲って会長に選ばれましたが、全力投球をもって、また筋を通して審議会の運営に当られた先生の姿勢と「上野ライン」を大いなる教訓とさせて頂きました。

上野先生は任期満了のため「基準協会」を退かれましたので、その後直接お目にかゝる機会は少なくなりましたが一九七七年京都の都ホテルで開かれた先生の古希祝賀会には、大学基準協会代表として馳せ参じました。その時私は、先生が益々お元気であられることを大変うれしく思いましたが、またその祝賀会がまれにみる盛会であることに驚き、上野先生が同志社と日本の大学全体において、いかに大きな存在であられるかということを改めて認識した次第です。また学会で京都におもむいた時、同志社の総長室にお招きを受け昼食にあずかりながらいろいろのお話を承ったこともなつかしく思い出されます。

以上のように、上野先生の残されたご功績は同志社に対するばかりでなく、日本の大学の歴史全体に及ぶものであったと思います。日本の大学にはまだまだ上野先生のご指導を仰がなければならない点が数多くあったのでした。それだけにご高齢であったとはいえ、先生のご長逝は文字通り惜しみても余りあるものと申せましょう。

小生はからずも昨秋病を得てまだ入院中のため、長い文章をつゞることが出来ず、充分意を尽せなかったことを上野先生のみたまとご関係の方々に深くお詫び申しあげます。

（成城大学学長・東京大学名誉教授）

上野直蔵先生追慕

木村俊夫

私が本学英文学科の学生であったのは、上野先生が留学先のシカゴ大学から帰られて、文学部に着任されて、ほんのしばらく後のことであった。爾来、弟子として、また共に同志社に働らく後輩として、親しく先生のご指導をうけたのは、四七年間ということになる。従って、先生については、実に多くのことが後から後から想い出されてくるのであるが、その一々を丹念に算えあげていけば、結局わが身の過去全体をふり返ることになってしまう。

とはいえ、先生は私より一周りも、二周りも大きい圏の中で縦横に活躍されていたのである。ご出身の英文学科をこえ、文学部をこえ、大学をこえ、全同志社を包む、のみならず、戦後の日本の大学、特に私学、の教育、研究の充実のためにつくされた、生涯にわたる、先生の広汎な活動の委細については、率直にいって、私はうといところがある。ただお目にかかって、文部省のこと、諸大学の状況について、様々の情報、意見をきかされては、井の中の蛙であってはならないということだけは思い知らされた。今東京に来ています、とか、九州にいます、とかいう短信もよくいただいたが、正に東奔西走、ご多忙の日が多かった。しかし、先生自らも語っておられる如く、先生が同志社の外にあって、どんな活動をしておられるときにも、頭の中にあるのは、常に同志社のことであった。先生と私の関係は、大きい師と小さな弟子ということになろうか。

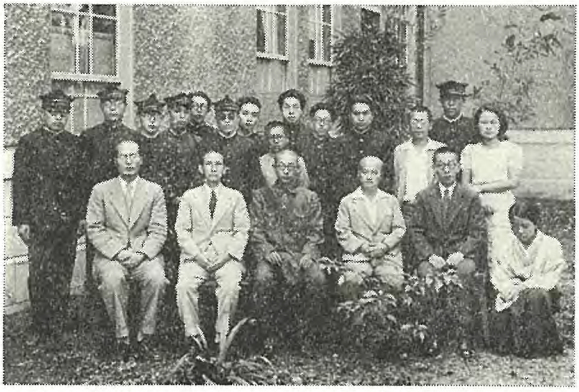
チョーサー学者の先生からは、まず「カンタベリ物語」のプロローグをテキストにして、中世英語の手ほどきをうけるなどしたのは勿論であるが、課外授業のおまけもついている。第二外国語をフランス語とする私が、ドイツ語もやっておきたい、といったのを聞かれて、そんなら手ほどきしてやる、というわけで、ドイツ語の初歩も教えてもらった。いっしょに習ったのは、私を含めて三人であった。テキストは何を用意しておけばよいのですか、字引は何がよいのですか、などたずねても、ただニコニコ笑って、まあ約束の時間に教室に出てきたらえー、という返事。それでその通りにしたら、なんと先生の方で、

昭和14年頃

テキストは勿論、字引まで用意していただいていた。そしてみんなタダであった。冠詞や動詞の変化を覚えるカードの景品もついていた。当時、同志社大学英文学会の財政ピンチを救うべく、映画「蒼氓」の鑑賞会を行なった。そのしばらく後のことであったが、右のカードはそのときの入場券の使い残りであった。

数ある想い出から、も一つぬいてみよう。自分がハーヴァード大学に行ったおかげで、拙いながらも、自分の学問的地盤を強化できたのも、偏えに先生の推薦によっている。一九五五年のことである。出発に際しては、向うのエリセフ教授に贈呈すべく、立派な狂言の画集を、先生自ら用意して私に託された。エリセフ先生はこれをうけとって、こんな立派なものを、と非常に喜んでおられた。これは今もハーヴァードのアジア研究所にあるはずである。幸いハーヴァードでの研究も、日常生活もが順調にいって、世話役のペルゼル教授の方からも、もし同志社さえ許すなら、留学延長をしてはどうか、といってもらった。上野先生からは、早速に、延長の件結構である、更に頑ばれ、という激励の手紙をいただいた。大塚総長からも、同じ頃、ハーヴァード当局の好意に対する謝辞も送られてきた。そんな頃、延長の手続きのことで、ペルゼル教授のオフィスを訪れた私に、教授がこんなことをいわれた。上野先生が私について書かれた推薦状は立派なものだ。正に私のことがぴったり正確に書かれてある。どうも、日本を含めて東洋から来る推薦状は、平板、おざなりで、被推薦者は何もかも立派、どうぞよろしく調のものが多い。しかし推薦状にはもっとカドをつけてほしい。本人の弱点があれば、それも指摘した上で、推薦すべき点は推薦してもらわないと、全く判断に苦しむ。その点上野教授のは一つの模範と思う。よかったら、こっそり見せてあげようか、というわけで、その場で私も読ませてもらったのであるが、今更のごとくびっくりしたのは、私の自認する性格の弱さなど、ピタリと指摘した上で、それをカバーして、具体的に推薦の理由が丁寧に書きつらねてあった。

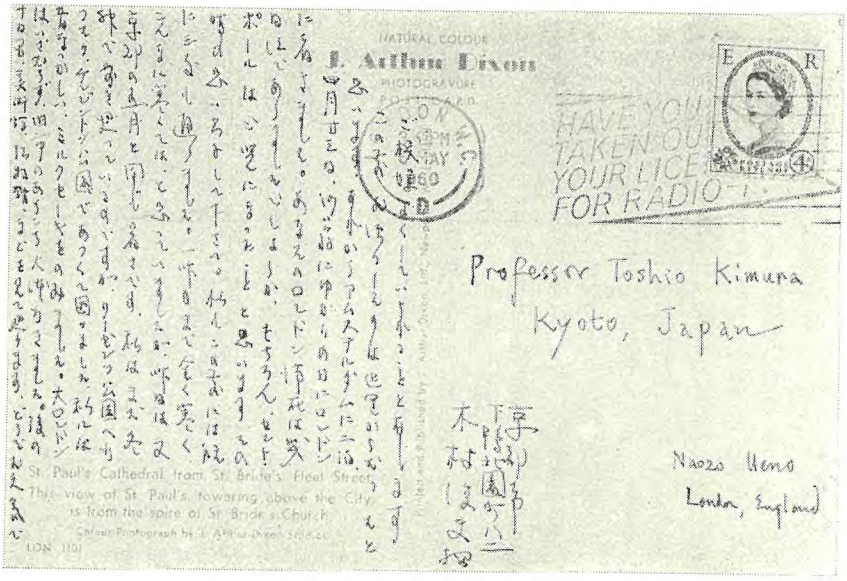
さていよいよ留学を終えて帰国となったとき、東京にいる後輩に、私が京都駅に着く時間を知らせよ、という指令が先生からあった



前列向って左端上野先生・後列向って右端久子夫人

そうである。お迎えいただくなど、とんでもないことである。しかし返事はしておかねばならぬというわけで、その後輩には一応時間は告げはしたものの、先生には、アスウカガウ、と電報を打っておいた。しかしやっぱり先生は駅で待ちうけておられた。ご苦労、とやさしくねぎらっていただいた上、家内とチビ二人共々、タワー・ビルの中でご馳走になり、乾杯をしてもらった。そしてタクシーに乗ってからも、君の家の方へ先に行く、といってきかれず、久しぶりの京都の夜の街を送っていただいたのだが、家内はあんなことしていただいて、えーのう、と恐縮していた。それでも、あーなってしもたら、しょうがないやないか、といっていた私も、本当にあんなことまでしていただくとは、夢にも思っていなかったことで、ありがたい気持でいっぱいであった。このハーヴァードの研究の機会があたえられていなかったら、私のシェイクスピア研究は、もっと底の浅いままであり続けたであろう。そういえば、オニールについて本にまとめることをすすめていただいたのも先生である。この本の出版が主としてきっかけになり、私はインディアナ大学のフレンズ教授の

昭和28年頃



昭和35年ロンドンからの短信

知遇を得た。そして最近になって、フレンズ教授編で、拙文を含む、オニール論集がアメリカで出版された。小さな本でしかないが、これは遂に先生にお見せすることができずじまいになった。

恥じいることも山ほどある。短気で、偏狭の私は、時に、先生にも盾ついた。あるときは、先生のいわれたことが納得できない、といって、先生のところに押しかけ、かっかと抗議したこともあった。先生はじっとうつむいて聞いておられたが、聞き終るや、ただ、もうえー、わかった、とだけいって、後は全く別の世間話に話題を移してしまわれた。このときは、先生の誤解のとけたことを喜ぶよりも、自分はまだなんと未熟であるか、という恥しい思いの方が強かった。

はげしい戦時下、授業もロクにできず、学校とは名ばかりの状況に短気を起した私は、先生のご好意を無にして、同志社をやめてしまっている。先生が、英文学科、否大学全体の逆境の中で、頑としてふみとどまり、やがて戦後の復興の中心的役割を果されたことは周知のことであるが、私はこれまた上野先生によって同志社に呼び戻されたのである。もし呼び戻されていなかったら、私は以後どんな道を歩いたことであろうか。あのときは、自分の短慮を卒直に先生にわびた。先生は、このときも、うん、といわれただけで、それ以後も、このことについては一切ふれられていない。

まだ何ほども書いていないのに、もう紙面もあまりない。私が別のところで、自分は、「先生の大きい度量、暖い雅量に包まれて、今日まで、いわばひっぱりあげられてきたのである。言葉の様々の意味において、先生は私の親分であった」と書いたが、今ここに書いてきたことは、そのごく断片的な例にしかすぎない。

一九三九年、私の学生時代最後の夏休みのある日、たしか英文学会の機関誌についての用件であったと思う。当時ハワイ寮におられた先生を訪ねたことがある。暑い日であった。二人は別々のテーブルに向って何か仕事をしていたが、急に先生は、今日は暑いなー、裸になるでー、というや否や、ゆかたも、シャツも脱ぎすてて、上半身裸になって、またテーブルに向われた。どうぞ、といって、ふっと顔をあげた私の目の前にあった先生の背中のなんとも大きいのをみて、びっくりしたことが、今もまざまざとよみがえってくる。あのごつさ、たくましさが、以後の先生に、次々にかぶさってきた重荷を耐えさせたように思えてならない。

年月すぎて、一九八三年の秋十月、故滝本二郎教授の告別式の日、自分の弟子の霊前に、声をおとして、弔辞をのべていられる先生を、ななめうしろの席からみていた私は、がく然とした。あの大きい、たくましいはずの背中が、がっくりと力を失ってみえたのである。英文学科では残念なことに、過去四年間、毎年、長老の教授、元教授を失ってきた。いずれも先生の愛しておられた後輩、教え子の方々ばかりで、その訃報の度毎に、先生は、さかさまごとの悲しみに耐えて、実に心のこもった見送りをされていたが、その時々にも、私は先生の背中に、若干の老いを見こそすれ、まだまだあれほど悄然たるさまを見たことがなかった。それから一年足らずで、先生は逝かれたのである。……

（大学文学部教授）

上野直蔵先生と『新島襄全集』

河野仁昭

『同志社百年史』の編纂が開始されたのは一九七七年五月であった。その翌月から、わたくしは上野総長のご意向で、編纂にたずさわることになった。わたくしはそれまで、新島襄のことや同志社史には無知にひとしかったから、予期していない仕事であった。適材はほかにいるはずだと、今も思っている。

総長室へうかがって、正直にそう申し上げたら、先生はにこやかに聞いては下さったが、それとは別のおこたえがかえってきた。

「私が総長にきまりまして、住谷（悦治）先生といっしょに大阪の校友会支部へ参りましたときに、住谷先生から、総長に就任したら『同志社百年史』の編纂と新島先生の全集を刊行して下さい、私の任期中にやれなんだ大事な仕事ですからと、車の中でいわれましてなァ。総長の事務引き継ぎはそれだけでした」

それから、こともなげに、「ご苦労さんですが、よろしゅう頼みます」とつけ加えられた。

亡くなられてもう十年ほどになる秦孝治郎元理事長もそうであったが、上野先生は聞き上手であった。言いたいだけ言わせておいて、あるいはそのように仕向けられて、やおらご自身のご意見をひとこと言われるのだ。こちらの言い分は十分きいていただいたというおもいがあるから、最後に告げられるひとことは拒みがたい。

あれはいつ頃であったか。わたくしが法学部事務室にいたころだから、一九六〇年代の前半である。東京の私学会館で教務事務研修会というのがあって（その頃の研修会はたいてい私学会館だった）、参加したわたくしは全体会のパネラーをやらされた。その日のプログラムが終って会場を出ようとしていたら、上野先生に呼びとめられた。先生は同志社大学の学長で、私立大学連盟の理事をなさっていて職員の研修を担当しておられたように思う。今夜、なにか予定があるかとたずねられたので、ほんとうは銀座へ行ってみたかったけれども「なにもありません」と申し上げたら、「では、晩飯を食べましょう」と、先生が泊っておられたホテルでご馳走してくださった。わたくしはカレーライスでも晩飯

に食べるつもりでいたのであった。

先生が教務部長をなさっていたころ、一度だけ入学試験のことでお話をうかがうことがあったきりだから、わたくしにはほとんど面識のないコワイ先生であった。そのコワイ先生と向かいあって、おまけにナイフやフォークを目の前にいっぱい並べられて、わたくしは上気し、そしてやたらに緊張していた。そのせいだろうが、折角の料理がなんであったか憶えていない。ただ、先生がナイフをほとんど使われないで、フォークだけで無造作に召し上がったことを憶えているだけだ。ああいう洋食の食べ方もあるのかと、わたくしは安堵したのである。型にとらわれることを厭う先生らしい作法だと思うようになったのは、ずっとのちのことであった。

それにしても、研修の場にいた同志社の職員というだけで、ろくな働きもできない一介の若僧を夕食に招待してくださった温情は、むろん、わたくしだけにそうして下さったとは思えないけれども、ずっと心に残っていた。

『同志社百年史』編纂の仕事は、一九七七年から三ヵ年の予定ではじめられた。最初の一年間は収蔵資料の整理についやされたから、実質上は二ヵ年の仕事である。編纂企画委員会はほとんど毎週開かれたが、上野先生が欠席されることはあまりなかったように思う。委員長であり、あらかじめ日程を調整しての会合ではあったけれども、一番早く出席されるのも先生であった。

委員会に出られても、積極的にご意見をのべられるのではなかった。万事、委員会におまかせしますという態度に終始された。わずかに、「編集」というより「編纂」とするのが妥当ではないかといわれたのと、「同志社の創立」という章題は「同志社の創業」がよくはありませんかといわれて、そう改めたことがあったのを憶えている程度である。「創業というのはええ言葉ですなァ」と、先生は照れくさそうにつけ加えられた。

先生の記憶力のすごさに舌を巻いた人は少なくあるまい。しかし、百年史の叙述に関連のありそうな事柄でも、先生はそれを委員会のあとなどで断片的に、世間話のようにときおり語られるだけで、記述の訂正や追加をもとめられるのではなかった。作業の渋滞をおもんばかってのことでもあったと思う。

作業は予定どおりには進捗しなかったのである。先生がひょっこり編集所へこられるのは、わたくしが報告を怠っているときであった。作業の遅延の弁解が辛くて、総長室の敷居が高かったのである。先生はきまって用件をもってこられた。それは、中国の漢詩の出典であったり、チャペルの献堂式の年月日のことであったり、新島の漢詩のことであったりした。すべて電話でことたりるようなこと、というよりはむしろ、何を調べればよいかをご存知のことばかりであった。そして帰りぎわにひとこと、「仕事のほうはどうですか」と言われるのであった。

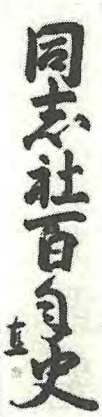
『同志社百年史—通史編』の見本刷が出来上ったのは、一九七九年十一月下旬、リ・ユニオンの前夜であった。リ・ユニオンの席でそれを参会者に紹介されたあと、先生はさっそく、同席されていた湯浅八郎先生に献呈された。湯浅先生は九十歳を超えておられたから、上野先生はご健康を案じておられたのである。

湯浅先生から同志社資料をご寄贈いただくことになって、わたくしはしばしば下鴨のお宅へうかがったが、帰ってきて上野先生にご報告にあがると、「湯浅先生はお元気ですか」

と、まずきかれた。ご寄贈のお礼にいっしょに行きたいともいわれたが、ごいっしょさせていただく前に、湯浅先生は永眠された。

あのとき献呈してしまわれた見本刷は、誤りの有無などを調べるための一冊きりのものであったが、あの場でそうはいえなかった。言わなくてよかったとのちになって思った。

『新島襄全集』編集刊行の話は、上野先生が言いだされたのではない。百年史の目鼻がほぼついたころ、百年史を手がけた体勢でなんとかやれるのではありませんかと、わたくしのほうから申し上げたのである。『福沢諭吉全集』でも『植村正久とその時代』でも、それぞれ学校史が刊行されて間もない時期に出ている。年史編纂の体勢を崩さないで、それに取り組んだにちがいないのである。上野先生はわたくしが言いだすのを待ちかまえておられたのであった。「やってみますかなァ」と、ちょっととぼけたようなおこたえであったが、百年史がやれたら全集もやれるのではないかとみておられたようであった。



上野先生遺墨

だが、『新島襄全集』は予想以上に難事業であった。同志社創立九十周年の記念事業の一つでありながら、遅々としてそれが進捗しなかったのも理由のないことではない。一九八〇年の秋、新しい編集委員会がスタートしたが、編集要領をめぐる議論が一年つづいた。

上野先生は黙然として議論をきいておられることが多かったが、会の最中にわたくしを廊下へ呼びだされることがよくあった。用件はたいてい、先生方の昼食の用意はしてあるのか、ということであった。委員会は朝の十時半から始められることが多かったので、ランチ・タイムにかかるのである。ときおり、「何かおいしいものを食べていただいてはどうですか」と言われるので、「何にしましょうか」とうかがうと、おこたえはたいてい「蒸し寿司でもどうですか」であった。

編集室を覗きに来られるのは、百年史のばあいと同じであった。仕事の進み具合を気にされてであったが、「たまには歩かんと、脚が衰えますのでなァ」と言われた。一度だけお叱りをうけたことがある。「確かな出版の予定日を言うといていただかんと、校友会の支部会などで私は嘘をついたことになるじゃないですか」と。

わたくしの出版予定日の推定は、しばしば甘すぎた。先生が待ち望んでおられるのが痛いほどわかるだけに、つい希望的予測になりがちだったのだが、出版社の見込みさえも外れることが多かったのである。

全集の第一巻が出版社から届いたのは、一九八三年二月、同志社大学の入試の前日であった。「難産でしたなァ」と、先生はひとことと言われて、インクの匂を嗅ぐように丁寧に一枚一枚ページをめくられた。

『新島襄全集』はまだ七巻を残している。電話で悲報に接したとき、受話器を握りしめたまま、わたくしはことばを失った。駆けつけるタクシーの中で、神妙に最後のご報告を用意しようとするわたくしの脳裡には、上野先生の微苦笑されているお顔がうかびあがるだけであった。

（本部社史資料室室長）

上野先生を偲ぶ

李　国　勝

十月三日の午後、上野先生の訃報を聞いた時、聞き間違えたのだろうと自分の耳を疑った。半月ほど前病院へお見舞に参上したが、これほどまでに早く私達から遠く離れてしまわれるとは思いもしなかった。だが、事実となってしまったことから目をそらすことはできない。私達新島基金の中国留学生は四日の午後一時三十分に上野直蔵先生の密葬式に参列した。チャペルの壇上には上野先生の遺影がかかげてあり、悲しみいたむ雰囲気の中で、どうしても平静でいることができなかった。みんなが立ち上がって悲しみのうちに讃美歌を歌う時、『式次第』を手にしている私たちは思わず目がかすんでしまった。これは決して、その場の雰囲気に染まってしまったのではない。優しくほほえんでいる遺影を仰ぎ見ると、先生との出会いが思い出されてきた。

それは来日したばかりの今年の三月のことであった。京都に着いたあくる日の午前、上野先生とお目にかかることになった。よいお年の先生はご談論が風雅で、思ったよりお元気であった。先生は、私たちの下手な日本語での自己紹介を聞かれて、「中国では濁音はないかな」と尋ねられた。先生の聴覚がこんなにも鋭いとは思わなかった。十日ほどしてから、先生から日本料理にご招待いただいた。お席で、二年間の留学研修(新島基金)を終えていよいよ帰国することになった西北大学

（中国・西安市）の于君と日本文学に関するお話をされた。先生はご気分がよく、夏目漱石の詩を暗誦された。その深くて広い知識、また記憶力にびっくりさせられた。そしてさらに先生は、同志社大学大学院工学研究科の博士課程に入った周君と一緒に記念写真を撮られた。ご高齢の上野先生がお忙しい時間をわざわざ割いて、若くてまるで子供のような私達を招待してくださったことは恐らく一生涯忘れることがないと思う。

上野先生は遠大で卓越した見識のある偉大な人物である。彼は学者であるばかりでなく、また国際的教育家でもあると言えよう。とりわけ我々中国へのご関心、そして世界への友好のご厚望は正に新島先生の精神の現れであり、新島先生の意志を継いだ人物と言うことができるであろう。中国には「吃水不忘控井人」（水を飲めば井戸を掘る人を忘れてはならない）ということわざがある。現在の互いの留学生の派遣及び学術交流は正に隋・唐以来の文化交流の延長でなくてなんであろう。先生自ら、中国の諸大学と関係を結ばれたことは両国の教育史において逸話として伝えられるであろう。中国への友好、私達に与えてくださった御配慮はいつまでも、私達の心に残るであろう。先生とお会いした時間は短かかったといえども、そのほほえんでおられる優しいお顔は永久に頭にやきついて離れないであろう。

「死ぬるも、死のおわりならず」。上野先生はこの世を去られたが、あの世の上野先生は教育事業と共に生き、中日友好と共存し、日本人民の心に、また私達の心に生きつづけることであろう。短い拙文ではあるが私達中国留学生の哀悼の気持を表すものである。

（学校法人同志社新島基金第六回招聘中国留学生中国湖北省武漢市武昌口武漢大学）

「霊は人を生かす」

――上野直蔵先生を憶う――

于　耀　明

それは十二月二十日のことだった。私は同志社から送られてきた『同志社時報』（七十七号）を読み終わり、閉じようと思ったときに、編集後記に書いてある「十月二日、上野直蔵先生が逝去されました」という文字に目がとまり驚いてしまった。一時息がとまりそうになった。うそだと思った。あんなお元気であった先生が亡くなられたとは、しばらくの間信じられなかった。しかし『時報』の活字になった以上、信じたくなくても信じるほかしようがなかった。とともに、胸が痛むほど悲しくなった。両手で顔をおおって、机に向って涙がぽろぽろ出た。この涙には二つのことが含まれている。一つは上野先生が遠いあの世へ行かれて、もうお目にかかれなく悲しいこと、もう一つは、先生がこの世を去られてから、もうすでに八十日間にもなるのに、なぜ私だけが知らなかったのかと悔しくてたまらないことだった。

私にとっての先生はただの先生ではない、先生が私の日本留学二年間の身元保証人だった。親の役割、いや親以上の役割をしてくださった。それなのに、先生がご逝去なさったことを知らなかったことは、親不孝の者に対する天からの罰ではないかと自分が自分を許さんばかりになった。その晩、私は夜が明けるまで、留学した二年間の同志社での生活に思いをはせた。とくに、上野先生とご一緒させていただいた時のことを一つ一つ思い出したが、先生のあのやさしくて、親切な、慈愛深い容貌がありありと目の前に浮び、私をはげまして下さったことばかりが思い出されるばかりだ。これはほんとうに不思議な現象である。あれほど悲しんだ私がどうして、先生とのことを思い出すと、悲しみの中に幸福だったことばかり思い出すのだろうか。二、三日この迷いみたいなものを解けることができなかった。こう考えているうちに、ある日突然ひらめきのように、私の心が明るくなった。神様のような存在だと胸の中でさけんだ。われわれ凡人には、「この世」と「あの世」を区別しなければならないのだが、神様には、こういう区別はないのである。ただ人間の世の中に困ったことがあれば、神様の聖霊が現われ、われわれを慰め、幸せにさせる。われ

われが幸せになると、神様の聖霊はまたほかのところへ行かれるのである。すなわち、われわれはいつも神様に守られているのである。上野先生は、このような神様の存在であると私はかたく信じるようになった。先生が逝去されたのではなく、先生の視線がほかのところへしばらく向いただけだ。先生のたましいはいつまでもいつまでも、私達の身近に、心の中におられるのであると。こう思うと、私はいつのまにか、自分は幸せ者だと思うようになった。

話はかわるが、私はほんとうにいろいろ上野先生のお世話になった。先生は私たち留学生の世話を親切に、かゆい所まで手が届くほどしてくださった。たとえば、先生がいくらお忙しくても、私たちの勉強や、生活をお聞きになることを忘れられなかった。新しい留学生が来ると、必ず歓迎会をしていただき、卒業する留学生がいたら、歓送会をしていただいた。また、私達留学生のために忘年会や新年会までしていただき励まして下さった。これらのことは、普通だと言ったら普通だが、しかし、私たち異国にいる外国人の留学生にとっては、必ずしも、普通のこととは思わない。私たちの異国にいるさびしい心を慰め、私たちの勉強を励ましてくださるのである。

私は同志社大学で日本文学のおもに夏目漱石を研究した。先生は英文学を研究なさっておられたが、日本文学、特に、夏目漱石も非常にお詳しく、お目に掛るたびに必ず漱石の話を聞かせてくださった。

特に私の思い出の一つとして、三月十四日（一九八四年）上野先生が南禅寺の近くにある料亭でご馳走してくださったことがある。私と工学部で勉強している周斌とが、修士課程を終え、いよいよ卒業する。このためのお祝いと、新しく工学部と文学部に来た留学生、刘明靖と李国勝とを歓迎する、歓送迎会であった。私はこの席上で上野先生の隣に二時間近くも坐って、食事をし、先生とお話ししたことであります。このときのことが今一番幸せに思っています。話は先生が若かったころのことや、アメリカで留学なさったときのことや、漱石文学のことでした。とくに漱石文学のことについては長い時間話し、先生が、まだ学生のころ、漱石の『明暗』（大正五年五月二十六日―十二月十四日）が『朝日新聞』に連載されたとき、自分は同級の友達と初夏から晩秋まで毎日毎日読み続けた。ところが、なかなか長くて終りそうもないので、皆んなで「漱石の『明暗』つきず秋暑し」というような俳句を咏んだ。あまり印象深かったので、六十年たった今もはっきり覚えていると、そして人間はいくら年とっても、若いころの楽しい話をすると、すぐ気が若くなるねと、嬉しそうにおっしゃった。この時の先生の楽しそうな笑顔はいつまでも私の心に残っております。実はこの俳句を先生から聞いたのは、この日が初めてではなく前にも一度先生から聞いた覚えがあった。この日先生がおっしゃったあと、すぐ先生に箸袋紙にボールペンで書いていただいた。今この先生の実筆を見ると感無量である。

先生のご実筆の話だが、ボールペンで書いてくださったものに、私が満足できず、先生にどうしても、筆で書いてくださいとしきりにたのんだ。先生はこころよく御承諾下さり、私が帰国の前日、先生にお別れのあいさつをしに総長室を訪れた時、先生は仕事の手をとめて、嬉しそうに迎えてくださり「もう明日帰るのですか。どうぞ坐りなさい」と親しげに話しかけてくださいました。私が坐る

と、先生は一冊の本と一枚の色紙を持ってこられ、お坐りになり「これは先日君と約束したものです。あれもいいですが、しかし、この句は、私が一番好きな句の一つです」と、話しながら、色紙を見せられた。見ると、色紙に書いてあったものは、私がお願いした『明暗』つきず」の句ではなく、「濃かに弥生の雲の流れけ里」と言う漱石が明治三十年三月に正岡子規に書いて送った俳句である。色紙の右側の下に「漱石」、左側の下に「直」と篆書でほった「上野直蔵」の判があった。「これは漱石の作った俳句ですが、意味は君には解かると思いますが、君が三月に帰るから、「弥生の雲の流れけ里」との句を選びます。またこれは中村宏という方が出された本『漱石漢詩の世界』で、ついこの間手に入ったのです。持っていなかったら、持って帰りなさい。君は中国人ですから、漱石の漢詩もしっかり研究なさい」と、先生が期待の意をこめておっしゃった。そして、先生の著書である『同志社百年――その前後』と『人生の詩』という本も、「謹呈于耀明君、上野直蔵」とサインをして頂いた。「先生どうぞお元気でいらっしゃってください」とお別れした。

ところが、思いもよらなかったことに、それが最後の会面になった。

さらにもう一つ上野先生から頂いたものがある。それは日本近代文学館から先生あてに送られた、「日本近代文学館」（第七十八号）という印刷物である。これは三月二十日のことだった。この日は私にとって忘れがたい日で、女子大の栄光館でおこなわれた卒業式に出席し、文学修士の学位をもらった日だった。卒業式が終り、栄光館のある部屋で上野総長先生と木枝学長、金田民夫文学部長、笹田教務部長と一緒に記念写真を撮っていただいた。この席上で、上野先生が、その「日本近代文学館」を私にくださった。「毎月送ってくれるものですが、もし役に立つなら、これから君のいる西安へ送ってあげますが」と先生がおっしゃった。私はお礼を申し上げながら、返答にちゅうちょした。というのは日本近代文学を研究している私にとっては、より情報をつかまえるいいものはない、役に立つのだが。あまり先生にお気を使い過ぎさせたらよくないと思って、役に立つか、立たないかすぐに何も答えなかった。今考えたら、悪いことをしたなと、どうして先生のご親切を素直に受けなかったのか、先生の気持を損じたのではないかと、気がかりになる思い出である。

上野先生と一緒にとった写真、先生に書いて頂いたもの、先生から頂いた本など、みなわが家の宝物になった。これらの物を見るといつも先生を思い出す。先生のご期待を思い、自分の学業を励すのだ。先生が私にくださったご恩は、山より高く、海より深いのである。

「霊は人を生かす」と多くの同志社人が新島先生のお霊によって生かされた。同志社の歴史は霊によって生かされた歴史でなければなりません（上野先生『同志社百年――その前後』「同志社の原点――良心教育」による）と先生がおっしゃったように、先生のみ霊も新島先生のみ霊と同じように、もっと多くの人を生かすと思います。

上野先生、海の彼方にも先生の教え子がいます。いつまでも、いつまでも、先生のお教えを忘れません。

（学校法人同志社新島基金第二回招聘中国留学生
中国陝西省西安市　西北大学日本語科）

〈上野直蔵先生を偲んで〉

終りの日日

上野久子

後列左から四人目が学生時代の上野夫人、ついで
園頓三教授、滝山徳三教授、上野直蔵助教授

私の胸には一つの絵がたたみ込まれています。秋の陽がキラキラと落ちてくる府立植物園の一隅を私と幼い孫のサトシとは椿の森の横を歩いて行く。向うから一人の老人がゆっくり来る。サトシは「おじいちゃん」と歓声を上げて飛びつき、ぶら下ろうとします。老人はよろよろとしながら世にこれ以上の幸福はない、という笑顔をします。サトシはおじいちゃんの後になり先になりながら駈け廻り、三人は北口へ向います。おじいちゃんは早咲きの山茶花を見たり黄水仙の群落を見て私とケンジントン公園のクロッカスのことを語ったりします。北口から出ると近くのケーキ屋さんでこの六歳の孫に特製のアイスクリームを食べさせるのがまたこのおじいちゃんのたのしみなのです。外に出るとこれまたこの上ない幸せそうな笑顔の木下さんが車で迎えに来て下さっていて、おじいちゃんはそれに乗ってバイバイします。午後の仕事が始まります。

こんな楽しい植物園の散歩はあまり度々はできませんでした。しかもそんな最中にも私の胸は冷たい、しめつけるような悲しみに一瞬つき刺されるのでした。夫が八十歳をすぎてからはその恐れはいつも私達の幸福の瞬間に頭をもたげました。彼の死は何時とは分らないけれど、確実に近くにひそんでいることは自明でしたし、幸福の時間のはかなさが私には分っていました。ローマの哲学者ボエシウスはその「哲学の慰め」の中で幸福が人生

還暦記念論文集贈呈式　昭和38年2月2日　アーモスト館

の常態だと思うな。不幸こそ、といっていますがそんな覚悟も必要でした。

この幼い孫はおじいちゃんの葬式の後元気がなくなり一ヶ月たっても回復しませんでした。私はこの子の母―私の娘―に「おじいちゃんの死が原因なのでは」といいましたが、娘は「そうではないらしいわ。私がおじいちゃんのお葬式のことをいっても一寸も分っていないらしいもの」と申しました。孫は週末には私の家に泊りに来ます。ある夜、この子を寝かしつけていると「アノネ。おじいちゃんは箱の中に入って行ってしまった。もう帰って来ないの?」ときます。私が「そうよ、もう帰っていらっしゃらない。」と答えますと「どこへ行ったの?」と彼はいっていましたがやがて涙が小さな丸い頬をすべり落ちました。彼は「おじいちゃんナァ」と何度もいっては声を出さないで、ただ涙を後から後から流しました。半時間ほどそんなにしていました。

私達は若かった時は苦労もありましたが、私が六十歳になった時から夫がなくなるまでは、少なくとも私にとっては人生で一番幸福な年月でした。私はよく友人に「今が私にとっては天国なの」といいましたが、娘たちもそれぞれに良い夫と結婚して家を離れ、元の二人きりになった私達は、頼り合って暮らしていました。娘たちが結婚してしまうと、もう貧乏も何も恐いものはありませんでした。夫が収入の何割を家に入れてくれていたのか分りませんが、二人が暮らして行けるだけのものはありましたし、たとえ彼が派手にお金を使ったとしても、悪いことに使うわけではなし、誰かを嬉ばせながら彼自身も楽しい時を過ごしていたのですから、何も文句はありませんでした。

夫が東京へ出張する時には私も時々はついて行けるようになったのもこの頃からです。「貴方はお金持、私は貧乏人。貴方はグリーン車でいらっしゃいよ。私は普通車で行きます」などとイヤミをいった後、結局はグリーン車に並んで行くたのしさ。途中で珍らしく富士山でも見えようものなら私は「ワーイワーイ富士山が見える」と大袈裟に騒ぎ立て、夫は「何だ。ぼくは何度も見ている」と得意そうな顔をするのでした。夜は夫が東京の知り合いの方とホテルの地下レストランなんかで食事をしている間、私は歌舞伎の立見を一つ二つして九時ごろホテルに帰ります。翌日の昼まえに夫は銀座のセンビキヤで何か食べたいといいます。私はここでも「苺が一粒二百円も三百円もするんじゃないの? そんな高いところで食べるのイヤよ」と夫をからかいながら、結局は御駈走になります。こんな平凡な旅でも私は大変うれしかったのですが、夫も結構うれしかったのでしょう。車中でもほとんど話をしないで一緒に居るだけでしたけれど、それでも彼が病んで最後が近くなった時、夢にうかされて発する言葉には「こっちだ、こっちだ。どこを向いているん

だ、八号車だよ」とか「あんた先に行きなさい」などと、彼は私と新幹線に乗っていました。

豪気であると共に細心でもあった彼も、年をとるに従って苦労性になり、負っている大きな責任の重さは少し苦痛だったのではないでしょうか。もっともそれはあの人が進んで、よろこんで引き受けたものでありましたし、あの人自身は苦痛だという意識はなかったようです。しかし体力が目立って衰えたこの二、三年は、残った少ないエネルギーを仕事と対人関係のみに集中して使っていましたから、家に帰ると疲労の色が濃く、無口が更に拍車をかけました。決して気嫌が悪いのではなく、時には冗談をいい、非常に平静な気分を持していましたが、ただ衰弱の度が少しずつ増して行きました。私は夫が家にいると心を痛めながらもうれしくて、ふざけたり冗談をいったりしましたが、特に彼を笑わせることができたのは幼いサトシで、この子が家にいると夫は仕事を忘れることができました。朝は夫とこの子が私より早く起きるので、時々事件が起ります。ある朝も私が降りて行くと孫がワンワン泣いていて、おじいちゃんはオロオロしていました。お餅の好きなこの子の為におじいちゃんがお餅をトースターで焼いてやったのは良いが、この子はそれを自分でお箸を使って小さく切るつもりだったのに、おじいちゃんが過剰サービスで切ってしまったというのです。孫に泣かれて、おじいちゃんは平あやまり。

夫はどんなに身体が弱っても自分の思うようにしか生きないだろうし、またそうさせるのが一番よいことなのだ、と私には分っていました。第一、私が夫の仕事に関与しないことという点で、二人の間に暗黙の合意がありましたので、一緒に過ごした四十有余年の生活の中でも夫がどんな社会的な活動をしていたのか、どんな方たちと仕事の上でどうかかわり合い、また英文科の卒業生の方たちとどんな支え合いをしていたのか、私はほとんど知りませんでした。私自身が自分の仕事で手一杯の時もありましたし、第一、私は地位や名声の空しさをかなり知っていたつもりなので、夫が学長になったり、その地位から去ったり、広島へ突然（としか私には思えませんでした）移ったり、それからこれまた突然に「天さかる」東の国なる横浜から東京へ通勤するようになったり、そんな人生の紆余曲折にはできるだけ心を動かされないようにしていましたから、その背後にどんなドラマがあり、どんな失意があり得意があったのか、夫の死後、親しかった方がたから伺ってやっと知ったようなことです。夫は私に語っても共感を得られないで、かえって「何故そんなことに執着なさるの？」などという冷淡な反応しか返ってこないだろうと思っていたのでは

喜寿祝賀会　昭和52年11月13日

ないでしょうか。もしそうならある程度彼は正しかったわけです。今一つ思うのは明治人間の常として「女、子供（つまり私は子供並みなので）には大事は語れない」と思っていたのでしょう。本当にその通りです。私にはよく分らなかったでしょう。ただいくら地位や名声の空しさを知ったつもりでも、今となって見れば、私は内心かなり夫のことを誇りにしていたと思います。家の近くの道を歩いていて、不意に夫の乗った学校の車から声をかけられて家まで乗せてもらったり、夫と旅行する時に周囲の方がたに丁重にしていただく時は、私は栄光の反映を浴びていることを感じました。夫が落ちついて出迎えの方がたに挨拶しているのを見ると、矢張誇らしい気になりました。彼は大胆で緻密な計画を立てることができ、先見の明をもっていましたし、何よりも責任感が強くて、沈着でありましたし、それに温い心をもっていて、それはさり気ない言葉に表われましたから、地位とかそんなものを抜きにしても立派な人でした。私はよく冗談半分に「貴方が立派な総長であることは認めるわ、総長である必要はないけれど。」といいましたが、実際、夫は私達が途方にくれてオロオロするような事には少しも動じませんでした。仕事が計画通りに行かない、誰かが失敗した、そんなことも多かったろうと思うのですが—思うのですが、というのは私は夫の仕事の内容については知らなかったので—あの人が動揺したのを見たことはありませんでした。いつも泰然として、時にはニッコリして冗談をいいます。それは見ていて心の休まるものでした。家のことについては夫は全くの無力で、全責任は私が負わねばならないような気が何時も私にはしていましたが、それにも拘らず、夫の傍にいると安心がありました。彼はどんなに困った時にも心の余裕をもっていましたから。

現実生活では極めて無器用で、ガスストーブの点火の方法が分らなかったり、コインを入れてミルクを買うことに失敗したり。数年前に私達がロンドンのホテルに滞在していた時です。近年は夫も足が弱く、歩みものろくなってしまって、外国の街を歩くのに私に五、六歩先を歩かせ、自分は手を胸で組んでノロノロついて来るのでした。私は絶えず後をふり返りながら—というのはうっかり私がさっさと角を曲ってしまうと彼は気が付かずに真っ直ぐに進んでしまったりするので—歩かねばなりません。体裁も悪いことで私は夫婦並んで歩いている人たちを心の底では羨ましく思っていました。ある朝私は夫にことわって一人で買いものに出かけました。身軽な一人歩きが楽しくてうろつき廻り、うっかり四十分あまりも所定の時刻に遅れてホテルに帰って見ると、夫は安堵と腹立ちとをごっちゃにして泣きそうな顔をしました。「遅いもんだから。パスポートも持たずに出ていったから、事故にでも遭っても身許は分らないだろうし、本当に心配した。はじめはアンマリオソイ、ウサギサンを唱って待っていたんだが」と彼がいったのには、私はおかしいやら可哀そうやらで胸を打れました。

一寸でも私の帰りが遅いと心配したり、自分が人とした約束に非常に忠実であったり、人を待たせないようにと心を配ったり、そんな苦労性の面は年を追って強くなって行きました。そんな気性ですから病気の間中も気嫌よく、時には冗談をいって一生懸命に病苦に耐えていてくれたのが哀れです。苦しい時でもどなたかが見えると気力を出してシャンとしていました。見舞っていただくことは彼の

心を慰めましたから、私は面会謝絶にふみ切ることはできませんでした。面談の大切さと体力の温存を量りにかけて迷いましたけれど。ただ最後にはげしい下痢が続いた時には「これ以上下痢が止まらないともう気力がなくなるよ」と申しました。それは大変可哀想でした。そしてやがて意識が混濁して行き、夢は田辺の校地をかけめぐりました。東京へ飛んでいました。はれがましい叙勲の祝賀パーティで挨拶していました。

勲一等瑞宝章受章祝賀会　昭和58年11月14日　都ホテル

夫は無口でしたけれど、言う言葉は簡潔で面白い表現をとりました。私は気の短い方なので、夫の省略した叙述が好きでした。私のいうことも二言三言で分ってくれましたし、洒落や冗談が通じ合えました。彼は冗談をいうとき、二手も三手も先の表現をするので、謎解きのような面白みがあって、夫としゃべるのは楽しみでした。私はいつも「貴方にどんな欠点があっても、無口という長所がそれを補って余りあるわ」といいましたが、冗談のやりとりも楽しいことで、私達にだけ通用する用語がありました。私が娘と一緒にどこかへ行こうとすると夫は「牛は牛連れ」といって冷やかしました。人間さまに相手になって貰えない連中が一緒に行動する、ということです。また私の方では「こういう主旨の話をしようと思うんだが」と夫が私の意見を求めるとき「それは野ざらしですね」といいます。江戸落語の野ざらしは何とかいう師匠のおハコで、つまりおハコということです。でもこの二、三年は夫は帰ってくると黙って大きな椅子に埋れるようにして、午後五時の肩のこらないチャンバラテレビを半ば放心したように見ていることが多かったので、私もその傍に坐って黙っていました。言葉による伝達に主として頼る西欧的人間関係ではなくて、ただ一緒にいて同じ空気を吸っていることで満足するような、直感的原始的なものでした。以前は時々若い頃、三越に通っていた時のことや、苦学時代のことなど話してくれたこともありましたが、最近はそれもありませんでした。ただ大学へ通うようになって私達と同居した孫息子と、例のサトシの存在は随分よろこんでいたようです。決して無責任な約束をしない人でした。いい加減な答えもしない人でした。幼い者に対してもそうで、そこには幼いといえども一箇の人間であるという認識がありました。病いがかなり重くなった頃です。サトシが家に来て、何時もするようにおじいさんを掛布団の上から撫でて「もう病気よくなったの?」とききました。私は傍にいて一瞬息をのみました。よくなったと答えたら嘘になります。「まだ」と答えたらこの子は悲しむでしょう。ところが夫はあんなに衰弱しているのにカラカラと笑って「それは難しい質問だな」と答え見事にこの

窮地を切り抜けました。

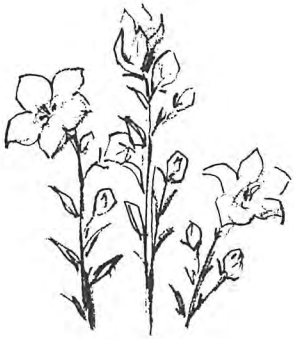
今、私はこんな原稿を書いていても、休日には端然と机に向って手紙など書いていた亡き人の姿が眼に浮びます。

レンブラントの数多くの自画像の中に、一六五四年に描いたものがニューヨークのフリック美術館にあります。その時彼はかなりの家庭的経済的破綻の中にあった筈ですが、この画では王者の誇りに満ち、毅然として座っています。その同じ彼が死の年の一六六九年に「放蕩息子の帰宅」を描きました。自画像とはいえません。息子は私達に背を向けて膝まづき、父の膝に顔を埋めようとしているのですから。けれども観る人は、この長い苦しい旅を終えて今は幼児のように父に抱き取られようとしているこの人こそレンブラント自身だと感じます。夫直蔵は人間として生きている間は一とり分け総長としては一気力、分別、忍耐といったような人間的精神力が必要であったし、また夫はそういうものを持たずにはいられない人でした。それは彼に備わったものでした。けれども神に対しては私達はすべて放蕩息子です。夫が死によってその身体は土に帰し、その魂は父のみ許に参じた時に、この画の人のように、安らかに素直に、肩の力を抜いて父の手に抱きとられたのだと思います。そう思いたいのです。そして父は愛する息子の為に肥えた豚を屠り美服を用意して下さったことでしょう。

それを思うと私の心は安まります。

本当に多くの方がたが夫の為に献身的につくして下さいました。有難いことです。

（上野直蔵氏夫人）



上野先生のご功績をふりかえって

一九八三年十一月三日、上野直蔵先生は、勲一等瑞宝章を受賞された。左にかかげるものは、その功績調書として学校法人同志社が文部省に提出した全文である。

上野直蔵は、明治三十三年十二月七日、京都市に生まれた。生家の経済事情から小学校卒業ののちいったん三越呉服店京都支店に就職して数年をすごした。働きながらも向学心やみがたく、こつこつと勉学を続け、ついに同志社大学予科に入学、その後昭和四年に同志社大学文学部英文学科を卒業した。晩学の人であり、大学卒業のとき実に二十八歳であった。しかしながら数年間社会の荒浪にもまれて苦労したことは同氏のその後の人生にマイナスをもたらしたのでなく、かえって大きなプラスをもたらしたことは明らかである。英文学者、教育者、教育行政家としてのその後のめざましい展開と功績をかえりみるとき、同氏のような人間味豊かで、学生や後輩の面倒をよく見、人々を激励してやまず、数字に明るく、二十一世紀の世界を見すえた高邁な大学の理念を持ち、大学の基準について卓抜な識見をもつようになったことの淵源は、若い日の血のにじむような苦労にあったことを首肯せざるをえない。まさに同氏は立志伝中の人である。

同氏の功績は一、同志社における功績、二、英文学者としての学会における功績、三、教育行政面での全面的規模での功績、の三つに大別できる。以下、この順序で記述をすすめたい。

一、同志社における功績

上野直蔵氏は、昭和四年三月に同志社大学卒業の半年後に同志社専門学校英語師範部講師として迎えられた。爾来四十年と七か月にわたり同志社大学、同志社大学大学院を中心に教壇に立ってきた。昭和九年に同志社の在外研究員として渡米し、シカゴ大学で昭和十一年まで中世英文学を専攻した。帰国後は同志社大学において専任講師、ついで助教授となり、昭和十六年に教授に昇進した。英米両

国と日本との関係が悪化の一路を辿り、英語が敵性語視された時期であり、英文学科の学生は激減していったが、上野氏は常に文学部の教授陣の中心的な存在として教育と研究にはげみ、殊に昭和十一年の同志社英文学会の改組後は、機関誌『主流』の発行、『同志社文学パンフレット』シリーズの発刊、学会連絡誌『L・L・L』の刊行等に成果をあげた。

第二次大戦後における同氏の活躍はめざましいものであった。先ず、戦争中に縮少のかぎり縮少された英文学科を再建、復興する責任を一人で背負い、カリキュラムをととのえ、有力教授を招聘した。時代を反映して英文学科は未曽有の盛況を呈するに至った。昭和二十五年に同氏の周到な計画によって大学院文学研究科に、英文学専攻の修士課程が設置され、また昭和三十年には博士課程も設置された。自らは主任教授として古代・中世英文学を講じた。同氏はこのようにして鋭意後進の指導、育成にあたり、その門下から幾多の俊才を輩出した。現在の同志社大学、同志社女子大学の英語、英米文学教育の第一線に立つ人々の過半数は上野の弟子である。

しかし同氏はひたすら英文学科だけに執着する人でなく、三年余にわたる文学部長として、文学部内各学科の陣容をととのえるために奮闘した名文学部長であった。その一つは昭和二十九年に文学部文化学科内に久しく待望されていた国文学専攻の設置を実現したことである。さらに二年余の教務部長として大学長を補佐し、特に一般教育の充実と改善に努力した。同氏は一般教育の理念をその原点に遡って学び直すために、コロンビア大学のマーク・ヴァン・ドーレン教授のリベラル・アーツ論である『新教育論』を翻訳して昭和二十四年に作品出版社から上梓している。この書は当時同志社大学では「教育原理」のテキストとして使用された。

さらに特筆すべきことは、わが国における戦後のアメリカ研究の二大中心地として、東京大学と同志社大学があげられるが、同志社をその地位にまで推進するに当って同氏のはたした役割がきわめて大きかったことである。これには同氏の進取の気象と先見の明、それにすぐれた英語の運用能力が貢献している。同氏は英語の演説を得意とし、外国学者との間に数々の友情を結んだ。すなわち昭和二十七年にロックフェラー財団の援助のもとに、京都大学と同志社大学が提携し、米国から数名の専門学者を招いてアメリカ研究夏期セミナーを京都大学で開いた。上野氏は同志社大学からこれの実行委員として参加したが、それには前年に東京大学で開かれたセミナーのときからの周到な企画と準備がものをいったのである。同氏はこのセミナーの実行委員として関西在住の老若のアメリカ研究者を誘い、京都の暑い夏をものともせずに、連日京大に通った。このセミナーを出発点として、翌年には同志社女子大学で同様のセミナーが開かれ、その後このセミナーは現在まで続いている。同氏は同志社大学長時代にはこのセミナーの委員長として尽力した。近年このセミナーが大きく成長し国際的となり、日本全国からだけでなく、アジア、大洋州からも参加者のある重要な年中行事となった。その上また国立の京都大学と私立の同志社大学が、このセミナーを四半世紀にわたって協力して維持発展させてきたことは驚嘆に値いする。この種の協力の例として他にどのようなプログラムをあげうるであろうか。そして、この基礎を築き、成育期の強力な指導者をつとめ

たのが上野氏だったのである。

このセミナーの副産物として同志社大学にアメリカ研究所が設置され、同氏はその初代実行委員長をつとめた。やはりロックフェラー財団の援助を仰いでアメリカ研究用の図書の充実につとめるとともに、若いアメリカ研究者を次々に米国に留学させる道を開いた。同氏は戦前の留学経験者であっただけに、若い教員の留学には常に寛大な政策を取り、二年連続の留学、時には三年連続の留学をも認めたのである。現在同志社大学アメリカ研究所は東京大学のアメリカ研究資料センターに並ぶ蔵書を誇り、また二十五年間続けてきたアメリカ研究夏期セミナーの常任幹事校をはたしている。またアメリカ学会の理事、評議員についても、相当数を同志社から出しているが、このもといはすべて上野氏の功績にほかならない。

上野氏が昭和三十五年に同志社大学長に選ばれたことは当然の成り行きであった。五年余にわたる大学長在職期間中に、同氏は強力な指導性を発揮して、職制をととのえ、学内の教職員の中から適材を発掘して要所要所に配置し、戦後の混乱期と試行錯誤期を脱出し、同志社大学のかたちをほぼ現在の規模に定めた。新町通にあった新日本電池の跡地を購入し、ここで学生の半数を教育するため、尋真館を中心とする校舎を建てた。ほかに神学館、工学部のために扶桑館と博遠館を建て、大学の設備を格段に充実した。神学館のごときはじめて教室内に冷房の設備をもち、ためにアメリカ研究夏期セミナーは昭和四十四年の大学紛争時まで毎年この神学館で実施することを得たのであった。同氏はまた学生の福祉厚生のために意を用い、当時日本最大の規模といわれた大学会館を烏丸通りに作り、しかもその使用法について学生との間に有効適切な協約を結んで、開館以来、管理権をめぐる実質的なトラブルなしに今日に至っている。此春寮、大成寮、松蔭寮という三つの鉄筋コンクリートの学寮を建設し、二部学生のために暁夕寮を購入した。また京都市内ではどうしても校地が狭あいであるため、理事会に強力に働きかけ、京都府下の田辺町に約三十万坪の校地を求めることに成功し、その後の学校法人同志社の発展の大きな基礎を築いたのである。

同志社大学の英語教育の向上のために次々に適切な教科書を作り、また英語の文法教科書をあらわしたのみならず、オーディオ教室の充実をはかるなど、常に英語教育のための助言と指導を怠らなかった。

同志社女子大学は戦後ずっと、上野氏をあたかも大学の顧問の如くに遇してきた。同大学の英語、英文学教育、大学院設置については常に尽力を惜しまなかったし、また大学院で兼任教授として古代中世英文学を担当してきた。

昭和四十五年三月、定年退職にあたり、同志社大学は同氏の功績に対し同志社大学名誉教授の称号を贈った。

昭和五十年、同志社の創立百周年の年に同氏は同志社総長に選ばれ、昭和五十三年からは学校法人同志社の理事長を兼務し、名実ともに同志社の最高責任者として現在に至っている。この九年間におけるめざましい働きの中に、昭和五十五年に関西で最初の帰国子女受入れを目的とする高校である同志社国際高等学校を京都府田辺町に設置したことが数えられる。また国際人である同氏は、同志社の創立者新島襄が学んだアーモスト大学との交流を着実にすすめてき

た。同志社内にある同志社アーモスト館の管理委員長として、アーモスト大学に対して常に責任のある対応につとめ、アーモスト大学代表を援助激励してやまなかった。その功績によりアーモスト大学は同氏に昭和五十五年 Doctor of Humane Letters の名誉学位を贈った。また中華人民共和国の西北大学等との交流をすすめ、同志社大学に給費留学生制度を新設し、中国からの留学生を受け入れるようにしたのも同氏である。これにより現在同志社大学大学院に二名、同志社女子大学大学院に二名の留学生が在学中である。また、昭和五十八年二月からは京都「国際学生の家」の理事長をつとめ、京都内外の諸大学に学ぶ外国人留学生に、日本人学生との共同生活の場を確保することにつとめた。同志社が創立百年にして、はじめて『新島襄全集』十巻を世に問うこととなり、昭和五十八年二月に同朋舎からその第一巻を出した。同氏はその編集委員長として指導力を発揮した。上野氏はかつて名文学部長、名大学長をうたわれた人であるが、同志社の名総長、名理事長として、今日に至るまでなお陣頭に立っている。

二、英文学者としての功績

学者としての上野氏は中世英文学者である。特にチョーサア学者としてはわが国有数の先駆者であり、チョーサア文学に対するボエチウスの影響に関する論究は、この主題に関するスタンダード・レファランスの一つとして高く評価されている。同氏は昭和二十七年に The Religious View of Chaucer in his Italian Period と題する学位論文により、同志社大学から文学博士号を得た。これは、昭和三十四年に南雲堂から出版され、海外の最も有力な英文学関係書誌にもそのタイトルがあがっている。昭和五十二年には米国でその海賊版が出たほどである。同氏のチョーサア研究は、昭和四十七年に出版された『チョーサアの「トロイラス」論』をもって完結する。このほか Historical Outlines of English（昭和二十八年）という英文の著作は簡潔ながらすぐれた英語史の書物として、のちに南雲堂から改訂版が出、今なお教科書として用いられている。同氏は同志社大学の英文学科を代表する学者として、英文学者の全国学会である日本英文学会の評議員を昭和二十六年から四十五年までつとめた。

同氏は英語、英文学だけでなく、アメリカ文学にも深い関心を示し、スタインベック、ヘミングウェイ、フォークナー、ヘンリー・ジェイムズ等に関する論文を発表した。またこれらの作家についてはラジオを通して講演したこともある。同氏の門下生の中から、すぐれた中世英文学者だけでなく、さらに数多くの優秀なアメリカ文学者が輩出したゆえんである。昭和三十年に関西アメリカ文学会が発足したときその学会代表に推され、三十七年に全国組織としての日本アメリカ文学会に改組されてからは、その関西支部長を昭和三十八年から昭和四十年までつとめた。

京都アメリカ研究夏期セミナーに関する功績についてはすでに述べたが、上野氏は日本におけるアメリカ研究者の全国組織であるアメリカ学会の会長を昭和四十三年から四十五年までつとめた。四十一年四月に同氏はこの学会が部会をもたない一本建の全国組織に統合改組されるよう働きかけ、文学研究者をも組織の中に含むよう尽

力した。その結果、学会が歴史、政治の研究に偏らないものとなり、また東京在住者に偏らないものとなって、学会の学際的性格、全国的性格が一層鮮明になった。

このほか、上野氏は、比較文学者の全国組織である日本比較文学会の委員として活躍し、特に昭和三十三年から四十年に至る間、日本比較文学会の機関誌『比較文学』の第一巻から第八巻までの編集を同志社で引受け、印刷の世話をした。上野氏のこの犠牲的な尽力なしには、この学会研究誌は最初の八年間の歩みをとげることはできなかったであろう。同学会は、今なお上野氏を関西における最大の功労者と見做している。

三、教育行政面での全国的規模での功績

上野氏は、ひとり同志社大学だけにとどまらず、戦後の新しい高等教育体制確立のため、また私立大学振興のための貢献が大きい。

昭和三十五年から五十五年にいたる二十年間に、私学人として日本の高等教育の発展のために指導者としてめざましい貢献をした人人を、敢えて主観的判断のそしりを恐れずに七名挙げるとしよう。それは村井資長、永沢邦男、大浜信泉、大泉孝、大木金次郎、佐藤朔、高村象平の諸氏である。そして、客観的に見てこの輝かしいリストにどうしても加わるであろう今一人の指導者が上野直蔵なのである。それは私立大学連盟の常務理事を十年間、文部省の大学設置審議会会長を約二年間、大学基準協会会長を二年九か月間、私学振興財団常務理事を二年間歴任した上野氏として当然すぎることである。しかも、このような役職にあげられたのは、同氏の人格、識見、学識、実行力のゆえであったことは言を俟たない。その活躍は人々の脳裡に刻みこまれているのみならず、私大連盟の発行してきた『大学時報』や、大学基準協会の『会報』のバックナンバーが雄弁に証明する通りである。

上に述べた二十年間はわが国の私立大学関係者にとって、私学への国庫助成という重大問題に取り組んだ時期であり、同時にそれはいわゆる学園紛争が全国の大学を席巻した昭和四十四年を含んでいた。同志社大学長としての上野氏は国庫助成運動については早くから熱心であり、関西の私立諸大学の責任者達と手を組んでこの運動を全国的な運動にまでもりあげていった。昭和三十六年に私立大学連盟の常務理事に就任してからは、この問題に最重要課題として取り組み、文部省や大蔵省、各政党の文教関係者と繰り返し交渉を重ねてきた。すなわち同氏は昭和四十年に私大連盟の中で、私立大学経営白書作成委員会の委員長となり、同時に国庫助成対策委員を兼ねた。全私学の悲願ともいうべきこの大キャンペーンはついに国会と政府を動かすところとなり、昭和四十二年には人件費以外の助成が実現し、四十四年からは人件費をも含む助成が開始されたのであった。私大連盟において、このほかに同氏は大学制度研究委員会の委員をもつとめた。同氏はヨーロッパにおける大学の発生とその発展の歴史に通暁しており、特に現代の英米の高等教育制度については、常に新しい文献を入手して研究することを怠らなかった。重要なものは自らこれを訳出して『大学時報』や大学基準協会を通して刊行した。さらに、同連盟傘下の大学の事務職員の研修事業の推進をも意欲的におし進めた。また私立学校教職員組合未適用校の加入

問題についても、加入の道を開く法律の改正に向けて運動をすすめた。

上野氏は全国の有力国公私立大学を網羅するわが国唯一の団体である財団法人大学基準協会では、理事を十八年、そのうち常務理事を七年、会長を二年九か月つとめた。わが国の大学の学問的水準の向上を図り、大学教育の国際的協力に貢献しようとするこの協会において、同氏は六年間にわたって基準委員会の委員長をつとめ、さらに単位制度研究分科会委員長、判定委員、一般教育専門部会主査大学問題研究会議座長、研究・教育小委員会主査、管理運営小委員会委員、大学財政小委員会委員、広報委員会委員長、図書館員養成課程基準分科会委員長、人文学部基準分科会委員長、外国語学部基準分科会委員長、文学・芸術学専門分科会主査、大学院問題研究委員会委員長などをつとめてきた。同氏はこの協会で合計十八の臨時委員会に参画した。しかも長らくの間、関西からの参加であったということは驚くに値する。

戦後に出来た新制大学の大きな特徴は単位制度と一般教育であったが、この二点について同氏は自分の主宰する二つの分科会の意見をまとめた「大学教育の改善についての意見書」を昭和四十年二月に文部省の大学基準等協議会会長宛提出した。同氏はまた基準委員会委員長在任中の昭和四十六年に「大学基準およびその解説」に全面的な検討を加え、会員大学がたえず大学の質的向上をはかるとともに、会員相互の協力と援助を推進するための、いわゆる「向上基準」として改訂を行った。その後「大学基準およびその解説」については、昭和四十九年に外国語科目の履修強化（二科目それぞれ八単位以上履修）の方向で改訂を行った。その他、新聞学、医学、歯学、教育学部、学芸学部、家政学、社会学、人文学部、外国語学部、衛生看護学、文学部等の各専門分野別の一連の諸基準に関し、新しい基準の設定あるいは改訂を行った。

同氏は大学院の基準についても鋭意検討を重ねた。すなわち大学院問題研究委員会の委員長として、大学院をもつ会員大学一七九校からの意見を求め、昭和五十一年に「大学院問題に関する対処方策についての意見書」を文部大臣あてに提出し、大学院において当面する教育研究、施設設備、管理運営、財政等の諸問題について、その対処すべき方策等を明確化した。同氏は、大学基準協会会長在任中に、理事、監事をもって構成する大学問題研究会議において長期にわたる討議の結果、昭和五十三年に「現段階における日本の大学問題に関する見解」を発表した。

大学基準協会における同氏の精励ぶりは、同協会発行の『会報』にてらしてあきらかである。この『会報』には十編以上にわたり、大学の入学試験、大学改革、一般教育、大学の大衆化と多様化、大学院、人文学部と人間科学部といった諸問題について、論説を発表している。大学基準の問題については、英米の諸大学の資料を翻訳して紹介することが幾度かあった。

文部省において同氏は大学設置審議会の委員を昭和三十七年から八年八か月つとめ、特にこの期間の最後の約二年間には会長の重責をになった。この期間に設置された大学の数は国立三大学、公立六大学、私立は実に一三六大学の多数にのぼる。これは昭和二十二年から二十四年にかけての、いわゆる第一次ベビーブーム期の子供ら

が大学に進学した昭和四十年から四十二年の時期を含んでいた。この時期の委員として同氏は北海道から九州まで、設置認可申請のあったところに赴いて、精力的に調査に当った。同氏は特に申請校の財政的基盤の審査に非凡な力を示し、また予定教授陣の内容についても適確にして厳正な評価を下した。また大学設置審議会の会長であった時期には、従来比較的認可の少なかった医科・歯科系大学の設置について調査審議し、文部大臣にその結果を答申し、医科・歯科系大学の新設について多大の功績があった。文部省において同氏はまた私立大学審議会の委員を昭和三十七年から八年、昭和四十九年から八年、合計十六年間つとめた。すなわち、文部大臣の諮問に応じて、私立大学、私立短期大学の設置、学部、学科の増設に伴う学校法人の寄附行為の認可に際し、主として財務状況など経営的な面から調査、審議を行い、その結果を答申した。また、学校法人寄附行為（変更）認可の方法の改善、同認可に関する基準を明確化するなど、私立大学等に関する重要事項について文部大臣に対し、建議を行った。以上のほか、設置認可後の学校法人の財政状況および施設等の整備状況などを把握し、学校法人の健全な経営の確保に必要な指導、助言を行うなど、私学行政に関して多大な功績を残したのである。

同氏はまた文部省の私立大学研究設備審議会委員を昭和三十八年から三年あまりつとめ、私立大学の研究設備のあり方を審議し、これに対する国の補助について検討した。文部省の大学基準等研究協議会の委員としては昭和三十九年から翌年にかけて十か月間、単位制度特別部会の委員として活躍した。

同氏はまた文部省の高等教育懇談会の委員を昭和四十八年から約四年間つとめ、わが国の今後の高等教育のあり方について種々の建設的かつ創造的な提言を行い、特に後期高等教育計画の作成にむけて貢献した。

わが国の私立大学の共通の悲願であった私学への国庫助成がついに実現することになり、昭和四十五年七月に特殊法人日本私学振興財団が出発した。上野氏は発足と同時に常務理事に任命された。住居を京都から横浜にうつし、二年間にわたりこの重要な財団の円滑な運営のために献身的に業務に取り組んだ。すなわち学校経営に関する情報の収集、調査研究、指導助言等を通じ、私立学校の経営の安定に日夜尽瘁し、この財団の特色ともいうべき調査相談業務の基礎を築いた。また学校法人の依頼に応じて経営診断を行い、あわせて経営の相談および指導に当るコンサルタント制度を定着させた。さらに、学校法人の事務担当者研修会を開催することにより、学校法人会計基準、諸規程の整備等、学校法人の実務面における質的向上を推進した。同氏はなお広報誌『月報私学振興』の編集発行人として、全国の私学とのコミュニケーションの場を提供することにつとめた。

上野氏は日本私学振興財団に入る前の半年間、広島商科大学長として、短期間ながらも文科系総合大学をめざして学部増設の布石を行ったのであった。同大学は現在広島修道大学として発展をとげている。

私学振興財団を退職後、同氏は横浜を引き揚げて再び京都に戻った。同氏の大学経営に関する識見と実行力を頼って援助を求める学

園はひきも切らず、ために同氏は席の暖まるひまもなく、兵庫医科大学の評議員、続いて理事、大阪女子学園の大学長、理事長、梅花学園理事長、続いて学園長、瓜生山学園理事等に就任した。なかでもキリスト教主義女子教育の伝統ある梅花学園の場合は、経営不能におちいったどん底での理事長就任であった。同氏は学園教学委員会を組織し、学園再建のための四大方針（一、学園の伝統と特色を明確にしたい。二、キリスト教と英語の教育に特に力を入れたい。三、短大は将来家政科と英語科の二科にしたい。四、大学は一学科増設したい。）を打ち出し、全教職員の一致協力体制を確立した。同氏はキリスト教と英語教育に特に力を入れ、高等学校と短期大学と大学を充実し、学科の増設を図り、さらには大学院文学研究科を設置するまでにいたり、瀕死の梅花学園を見事に立ち直らせたのである。梅花学園関係者や同窓会が、上野氏を中興の恩師と仰いでいるゆえんである。

昭和五十年に同志社総長に就任以降、同氏は財団法人京都市文化観光資源保護財団評議員として、また京都国際文化協会顧問として貢献するとともに、さらに関西文化学術研究都市建設推進協議会委員、文化学術研究都市建設推進京都府協議会委員として、京阪奈学術都市の建設をめざして創造的な助言を行った。

以上、上野直蔵氏の功績の概略を述べた。同氏は英文学者であるが、学者の偏狭固陋におちいることがなかった。同氏は教師としてあまたの学生を鍛え、あまたの弟子を学界に送ったが、その弟子の誰よりも数字にくわしく、学園経営の手腕にすぐれていた。同氏は卓越した学園行政の名手でありながら、教育の本質は金銭や校舎でなく、究極的には血の通った人間関係であると信じた。同氏は京都生まれの人でありながら、京都人らしくないスケールの大きさを常に示した。同氏は同志社を代表する人でありながら、その気概には日本の全大学を代表するものがあり、すべての大学が質的に向上することを願った。同氏は常に二十一世紀の日本の教育と世界史の行方を視野に入れて物を考えてきた。聖書の中に「小事に忠実な人は、大事にも忠実である」という一節があるが、上野直蔵氏こそはまさしくそのような人であり、それ故にこそ、「善かつ忠なる僕（しもべ）」と呼ばれるに値すると信じるものである。

（文責者・大学文学部教授・北垣宗治）

故上野直蔵略歴

1900（明治33）年12月７日　京都市上京区一条通大宮西入鏡谷町に生まれる
1926（大正15）年３月　同志社大学予科修了
1929（昭和４）年３月　同志社大学文学部英文学科卒業
1932（昭和７）年６月～1934（昭和９）年３月　同志社専門学校英語師範部教授
1934（昭和９）年４月～1936（昭和11）年３月　同志社大学在外研究員として渡米し、シカゴ大学で中世英文学を専攻
1936（昭和11）年４月～1938（昭和13）年３月　同志社大学文学部講師
1938（昭和13）年４月～1941（昭和16）年３月　同志社大学文学部助教授
1940（昭和15）年４月　小野寺久子姉と結婚
1941（昭和16）年４月～1970（昭和45）年３月　同志社大学文学部教授
1942（昭和17）年４月～1944（昭和19）年３月　同志社専門学校高等英語部長
1949（昭和24）年４月～1956（昭和31）年３月　同志社大学文学部長（この間２期）
1950（昭和25）年４月～1970（昭和45）年３月　同志社大学大学院教授
1952（昭和27）年12月　文学博士（同志社大学）の学位受領
1960（昭和35）年７月～1965（昭和40）年12月　同志社大学長　学校法人同志社理事
1961（昭和36）年３月～1971（昭和46）年２月　社団法人日本私立大学連盟常務理事
1961（昭和36）年３月～1979（昭和54）年６月　財団法人大学基準協会理事
1962（昭和37）年10月～1971（昭和46）年６月　文部省大学設置審議会委員
1962（昭和37）年11月～1970（昭和45）年10月　文部省私立大学審議会委員
1966（昭和41）年６月～1969（昭和44）年５月　学校法人同志社評議員
1966（昭和41）年８月～1969（昭和44）年８月　学校法人同志社理事
1968（昭和43）年４月～1970（昭和45）年３月　アメリカ学会会長
1968（昭和43）年６月～1970（昭和45）年６月　財団法人アメリカ研究振興会理事
1969（昭和44）年１月～1972（昭和47）年１月　日本学術会議第八期会員
1969（昭和44）年６月～1976（昭和51）年10月　財団法人大学基準協会常務理事
1969（昭和44）年７月～1971（昭和46）年６月　文部省大学設置審議会会長
1970（昭和45）年１月～1970（昭和45）年７月　広島商科大学（現広島修道大学）学長
1970（昭和45）年３月　同志社（大学）を定年退職　同年４月　同志社大学名誉教授の称号を受く
1970（昭和45）年７月～1972（昭和47）年６月　日本私学振興財団常務理事
1972（昭和47）年11月～1984（昭和59）年10月　学校法人兵庫医科大学理事・評議員
1973（昭和48）年４月～1976（昭和51）年１月　学校法人大阪女子学園短期大学長
1973（昭和48）年４月～1984（昭和59）年10月　学校法人大阪女子学園理事
1973（昭和48）年８月～1978（昭和53）年３月　学校法人大阪女子学園理事長
1973（昭和48）年５月～1977（昭和52）年３月　文部省高等教育懇談会委員
1973（昭和48）年８月～1978（昭和53）年３月　学校法人梅花学園理事長・学園長（1974年４月より）
1974（昭和49）年10月～1982（昭和57）年11月　文部省私立大学審議会委員
1975（昭和50）年11月～1984（昭和59）年10月　学校法人同志社総長・理事
1976（昭和51）年10月～1979（昭和54）年６月　財団法人大学基準協会会長
1977（昭和52）年６月～1984（昭和59）年10月　学校法人藤川学園（現瓜生山学園）理事
1978（昭和53）年６月～1981（昭和56）年５月　学校法人同志社評議員
1978（昭和53）年11月～1984（昭和59）年10月　学校法人同志社理事長
1980（昭和55）年５月　米国アーモスト大学より Doctor of Humane Letters（名誉文化博士）の学位受領
1982（昭和57）年７月～1984（昭和59）年10月　文化学術研究都市建設推進京都府協議会委員
1982（昭和57）年12月～1984（昭和59）年10月　財団法人京都「国際学生の家」理事長
1983（昭和58）年３月～1984（昭和59）年10月　関西文化学術研究都市建設推進協議会委員
1983（昭和58）年11月　勲一等瑞宝章受章
1984（昭和59）年10月２日　午後６時８分永眠　従三位に叙せられる